

中の池遺跡発掘調査概要

—香川県丸亀市金倉町所在の
弥生時代遺跡の調査—

1982年 3月

丸亀市教育委員会



環濠 SD8105 (北から)



環濠 SD8105 (東南から)

序 文

丸亀市の南西部にあたる金倉町中ノ池地区には、弥生前期から中期に至る時期の集落遺跡があり、多度津町三井遺跡や普通寺市五条遺跡など周辺の弥生遺跡との関連の上からもその重要性は大きいといわれております。

この中ノ池遺跡の発掘調査を昭和56年度におきまして香川県教育委員会の御指導と御協力を得て、中ノ池住居跡緊急確認調査として実施いたしました。

この調査では表土下約1m、幅3mから4m程の黒褐色粘土質の堆積した溝状部が3個所で認められ、その中からは土器、サヌカイト製石器、動物の歯片などが出土し、その西側には住居跡と認められるものが発見されました。これらは測量記録、写真記録の上、埋戻しを行ない調査を終了しました。

発掘調査の結果、多数の遺物が出土したことは、今後の埋蔵文化財の研究資料として貴重な役割を果たすものと確信いたしますとともに、この報告書が埋蔵文化財研究のための資料の一助となりますれば幸いです。

おわりにのぞみ、この発掘調査にあたり御指導と御協力をいただきました香川県教育委員会ならびに地元関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和57年3月

丸亀市教育委員会

教育長 井澤 滋

例　　言

1. 本書は丸亀市教育委員会が、国・県の補助金を受けて実施した中の池遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査は丸亀市教育委員会が事業主体となり、調査の実施にあたっては香川県教育委員会文化行政課藤好史郎が担当した。
3. 本書の作成作業において、執筆・実測・遺物写真は藤好が担当し、実測図のトレース・遺物一覧表・構成図等の作成に安藤 一氏の協力を得た。
4. 本書の編集は藤好が行った。
5. 調査に際して、作業員として参加された丸亀市・善通寺市の方々また調査・整理期間中を通して助言をいただいた宮武 進氏、文化行政課他の諸氏にお礼を申し上げたい。

〈本文目次〉

I 調査の概要と経過	7
1 調査の概要	7
2 調査の経過	9
II 遺構	11
1 溝SD8101	11
2 溝SD8102	11
3 溝SD8105	11
4 他の遺構	14
III 遺物	18
1 SD8101出土土器	18
2 SD8105出土土器	19
N まとめにかえて	24

〈 図 版 目 次 〉

図版 1	中の池遺跡（西方・天霧山から）	35
	C・D列（西から）	35
	6列（北から）	35
図版 2	10列（北から）	36
	10列（南から）	36
	H列（東から）	36
図版 3	SD 8101（北西から）	37
	SD 8101・D 8・配石遺構全景（北西から）	37
	SD 8101・D 8・配石遺構内壺出土状況（北東から）	37
図版 4	SD 8101・D 8・土層断面（北西から）	38
	SD 8102（南東から）	38
	SD 8102・D 10・蛤刃石斧出土状況（北から）	38
図版 5	SD 8105・C 5～E 7（北西から）	39
	SD 8105・C 5～E 7（北北西から）	39
	SD 8105・C 5～E 7（東から）	39
図版 6	SD 8105・D 6・土層断面（南東から）	40
	SD 8105・G 10（南東から）	40
	SD 8105・G 10・土層断面（南南東から）	40
図版 7	SD 8105・E 7・遺物出土状況（北西から）	41
	SD 8105・C 5・壺出土状況（東から）	41
	SD 8105・D 6・壺出土状況（北から）	41
	SD 8105・E 7・獸下がく骨出土状況	41
図版 8	SD 8105・G 10・礫群検出状況（南東から）	42
	SD 8105・H 10・甕出土状況（西から）	42
	SD 8105・G 10・土器出土状況（東から）	42
図版 9	E 6・F 6 ピット群（南東から）	43
	E 6・F 6 ピット群（東から）	43

F 6 · SK 8 1 2 5 遺物出土状況（北東から）	43
図版 1 0 H 5 · 6, I 6 土壌群（南東から）	44
H 5 · 6, I 6 土壌群遺物出土状況(東から)	44
H 5 · 6, I 6 土壌群完掘後（北から）	44
図版 1 1 SD 8 1 0 4 完掘前（南東から）	45
SD 8 1 0 4 完掘後（北西から）	45
SD 8 1 0 4 発掘風景（南東から）	45
図版 1 2 SD 8 1 0 1 上層出土土器	46
図版 1 3 SD 8 1 0 1 上層出土土器	47
図版 1 4 SD 8 1 0 2, 0 3, 0 4 及び土壌出土土器	48
図版 1 5 SD 8 1 0 5 上層出土土器	49
図版 1 6 SD 8 1 0 5 上層出土土器	50
図版 1 7 SD 8 1 0 5 上層出土土器	51
図版 1 8 SD 8 1 0 5 上層, 中層出土土器	52
図版 1 9 SD 8 1 0 5 出土土器, SD 8 1 0 1 出土石器	53
図版 2 0 SD 8 1 0 2, 0 4, 0 5 出土石器	54
図版 2 1 SD 8 1 0 5 出土石器	55

〈 捷 図 目 次 〉

第1図 中の池遺跡の位置	7
第2図 昭和51年度、56年度調査区及び遺構配位図	8
第3図 調査区北部遺構実測図	12
第4図 調査区南部遺構実測図	13
第5図 調査区西部遺構実測図	14
第6図 溝断面土層図	16
第7図 SD 8101上層部配石遺構実測図	16
第8図 鰐口縁形態別構成比図	21
第9図 鰐口縁形態別構成比図	21
第10図 鰐口縁形態別構成比図	21
第11図 鰐口縁形態別構成比図	21
第12図 鰐沈線条数構成比図	22
第13図 SD 8101出土土器実測図	26
第14図 SD 8101出土土器実測図	27
第15図 SD 8105出土土器実測図	28
第16図 SD 8105出土土器実測図	29
第17図 SD 8105出土土器実測図	30
第18図 SD 8105出土土器実測図	31
第19図 SD 8105出土土器実測図	32
第20図 SD 8105出土土器実測図	33
第21図 SD 8105出土土器実測図	34

〈 表 目 次 〉

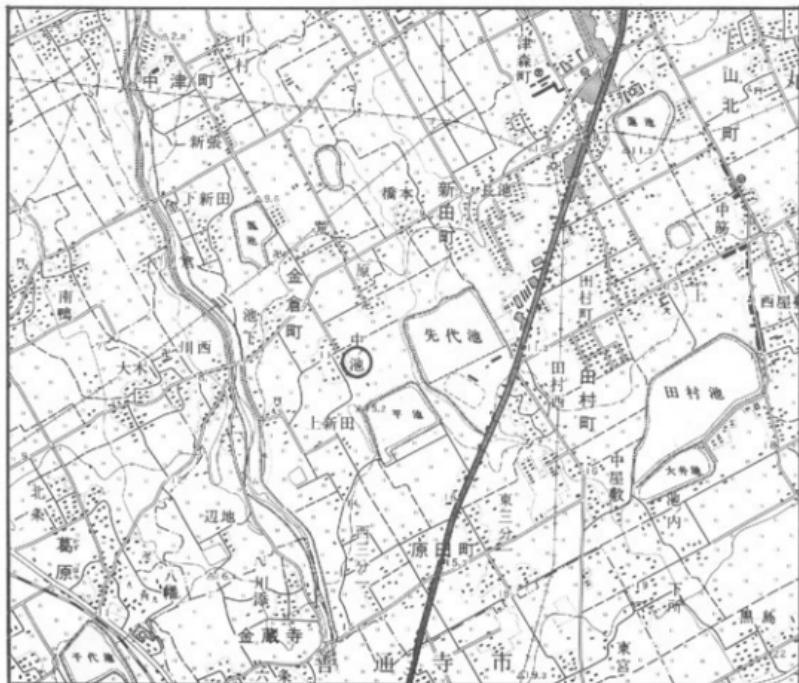
表1 土器観察表 (i)	57
表2 土器観察表 (ii)	58
表3 土器観察表 (iii)	59

I. 調査の概要と経過

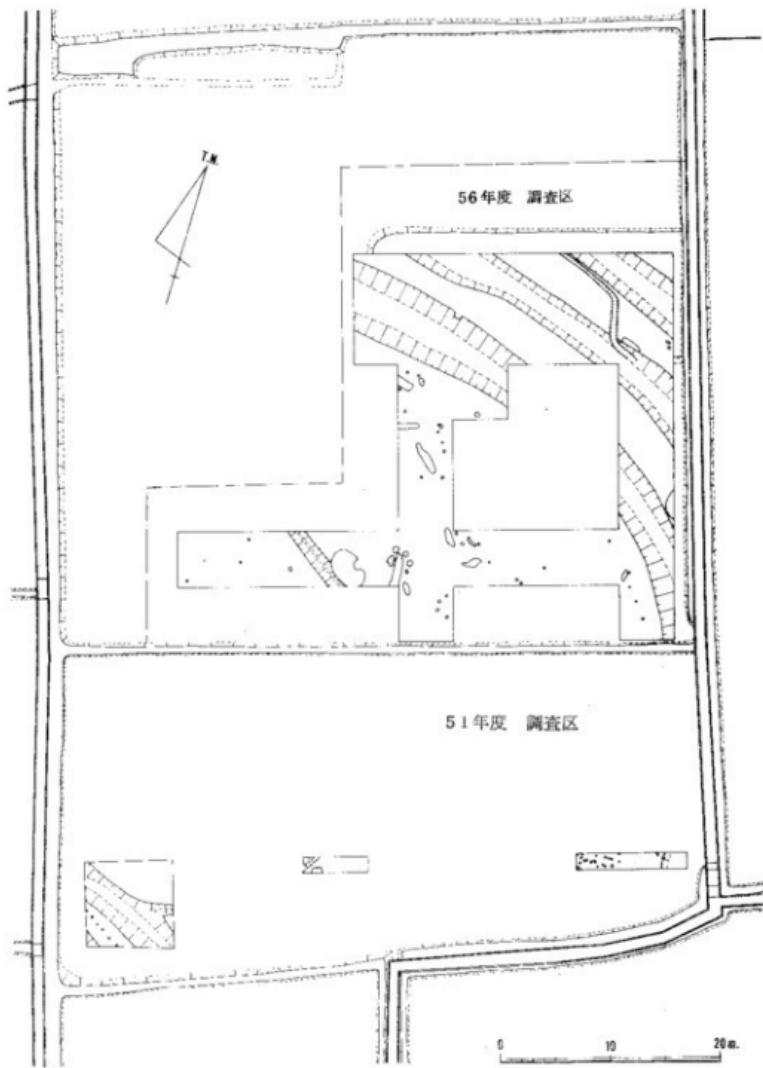
1. 調査の概要

中の池遺跡は主に土器川、金倉川の河川によって形成された丸亀平野の中央部北寄りに位置する。標高は10m前後を計る。近くには同じ弥生前期の遺跡として普通寺市五条遺跡、多度津町三井遺跡などがあり、いずれもほぼ同様な立地を示す。

中の池遺跡は昭和51年度に一部確認調査を実施しており、今回の調査対象地は51年度調査地区のすぐ北に位置し、丸亀市金倉町 994 番地に所在する。現状は水田である。昭和51年度に実施した調査により、遺跡は弥生時代前期に属する遺跡で環濠を有する集落遺跡である可能性が考えられてきた。遺跡の周辺は水田が多く、旧状を残している。しかしこの地域は良質の粘土を産することから陶器の素材として採土による破壊や道路、住宅の建設等による開発が行われる可能性があり、遺跡の内容・範囲などを確認する必要が生じ、今回の発掘調査を実施することとなった。



第1図 中の池遺跡の位置



第2図 昭和51年度、56年度調査区及び構造配置図

今回の発掘調査は対象面積 1,675 m²を計り、実質発掘面積は 700 m²である。まず前回の調査から距離を隔てた調査区の北部を面積的に広く調査した。その後、南に調査区を拡張し、昭和51年度調査との関連究明を計った。前回の調査で環濠の可能性がある溝が検出されたが、今回も調査区の南東部から北西部にかけて幅 5 m前後、深さ 1 m弱の大規模な溝が 3 本検出された。3 本の溝は 4 m程の間隔をおいて、ゆるやかな弧を描いて平行して走る。その弧の中心は調査区の南西部にある。環濠と考えられ、内部からは多量の遺跡が出土した。中央を走る溝の最上部からは配石遺構が検出され、内部に完形の壺が置かれたような状況で出土した。両側を走る溝は内部に他とは異なる施設があるなど、集落の周囲にめぐらされたと考えられる環濠の性格の解明の一助となる大きな成果があげられた。

環濠の南西部は集落の内部と考えられ住居跡等の検出の期待があったが、調査以前に行われた地下げで遺構の残存状況は良くなかったが、住居跡と考えることもできる遺構や樹列が検出されるなど集落の構造等を解明するうえでは大きな成果があったと言えよう。

2. 調査の経過

調査期間中の作業の要点を進行順に記述する。

- | | | |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 8月31日 | プレハブ建設。 | 上層部発掘作業。 |
| 9月4日 | 発掘調査開始。5 m方銀のメッシュで杭打ち。東西方向…西より 1, 2, 3, …、南北方向…北より A, B, C, …。グリッド名は西北隅の杭名で称する。物品搬入。 | SD8105 の D - 6 で阿方式塗口縁を検出。 |
| 3日 | C 列より発掘開始。 | SD8105 の D - 6 - D - 7 で溝の底に柱状の地山の盛り上がりを検出。 |
| 7日 | SD8101 の上面確認。 | 10月に入って稻の収穫作業などとの兼ね合いで、作業員が極端に減少する。 |
| 22日 | D 列の発掘開始。 | SD8101 の D - 8 の上層部において配石遺構と完形の壺が検出される。祭板の可能性が考えられる。 |
| 25日 | D 列の遺構面検出作業で C 列の三本の溝のつづきの部分が判明。ただし、いたるところに現代の擾乱部がある。 | HII 列の耕作土除去作業にかかる。 |
| 28日 | SP8101, SD8101, SD8103 の切り合いを検出。
現場発掘作業と雨天には整理作業を実施。 | G - 10 で SD8105 のつづきの部分の上面を検出。 |
| 10月2日 | SD8105 の D - 6 - D - 7 において | 上記(9月) |
| | | 11月4日 SD8105 の G - 10 において縄の出土状況の写真撮影。 |

- 7日 H 2～5 の現代攪乱部の除去作業。
D列よりも南部では、粘土採取等のためかなりの地下げが過去に行われていることが判明。調査員が1人のため写真・実測などに追われる。
- 17日 SD8105 の G - 10においても溝の断面は階段状を呈し、底には D - 6・7 で検出された触状の地山の盛り上がりが部分的に存在することが判明。
- 30日 SD8105 は特に D - 6・7 において他の溝とは様相を異にするため、E - 7 に発掘区を拡張する。それと同時に C - 5・D - 5 にも調査区を拡張。
今月になり善通寺からの作業員を導入。
- 12月 3日 C - 5・D - 5 の拡張区で猪と考えられる獸骨の歯及び下顎骨が出土。
E - 7 の灰褐色土層から炭化米が出土。（いずれも SD8105）
- 4日 SD8105 の D - 5～E - 7 において底の南部に柵列と考えられる小ピット群が30cm程度の間隔で検出される。
- 7日 本日より丸亀市の運動公園内のブルーを使っての遺物の整理作業を、現場作業と併行して実施。C・D列他の遺構の実測・写真に追われる。
- 23日 午前中に調査区周辺の地形測量が完了し、午後板出の事務所へ物品の搬出作業を行い、現場作業終了。以後整理作業。
- 1月 14日 常設現場の埋め戻し作業。
- 2月 3日 丸亀市での整理期間が終了し、県庁へ引き上げる。

II. 遺構

調査区の東南部から西北部にかけて環濠と考えられる3本の規模の大きな溝が走り、その南西部において土器や炭化物を含む土壇や柱穴と考えられるピット及び小規模の溝が検出された。調査を北部のC・D列以外はすでにかなりの地下が以前行われており遺構の残存度は良くない。

1. 溝SD8101

環濠と考えられる3本の溝の中で、中央を走る溝である。幅4m、深さ0.7m前後を計る。約25mの長さで検出した。東部は以前の地下げで、遺構上面より10cm程削平されている。他の環濠と考えられる溝とは異なり、「U」字形の上部が大きく開く単純な断面形を呈している。溝は東南部よりも西北部がやや低く、西北端で一段深くなっている。

溝の埋土は、西北端の一段深くなった部分の最下部でうすく堆積した細砂層が検出された以外、有機分を含んだ暗い色調の粘質土である。埋土中で砂質の発達が認められないことから、溝はまだやかな状況で埋没していったことがうかがわれる。

溝中央部D-8・9区において配石遺溝を検出した(第7図)。溝がかなり埋没し当初の規模から著しく浅くかつ狭くなっている段階で、西岸を中心に拳大の河川礫を敷きつめるように配している。配石遺構の中央部で、完形の壺を検出した。壺が魔棄されるのに伴う祭祇遺構と考えられる。

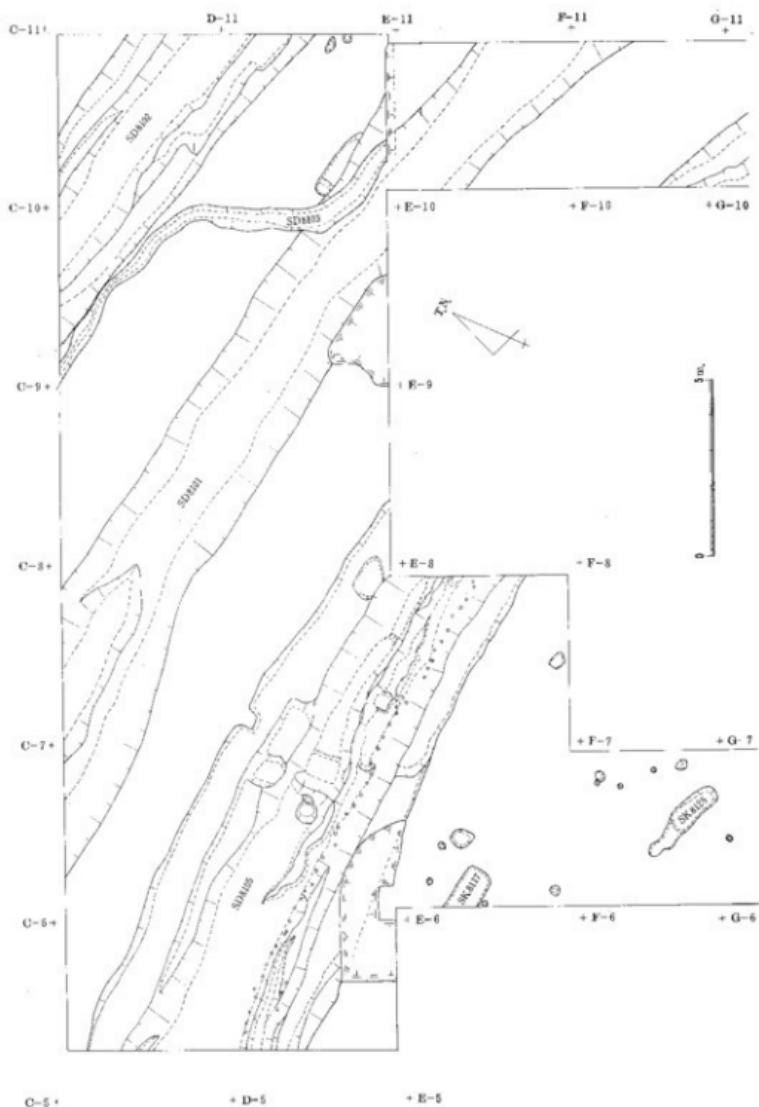
2. 溝SD8102

調査区の東北端で一部検出した溝である。3本の環濠と考えられる溝の中で東側に位置するものである。幅4.5m、深さ0.8m前後を計る。約9mの長さを検出した。中央の溝SD8101とは4m程隔っている。

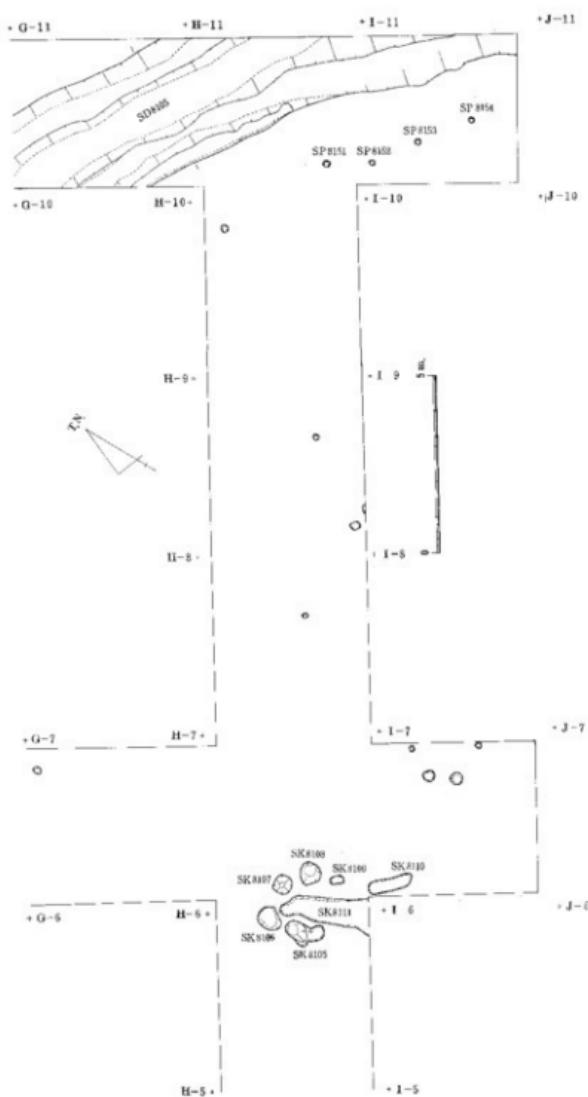
最下部にわずかに砂を含むが、他は有機分を含んだ暗い色調を呈する粘質土が埋土となっている。静かな埋没状況がうかがわれる。

3. 溝SD8105

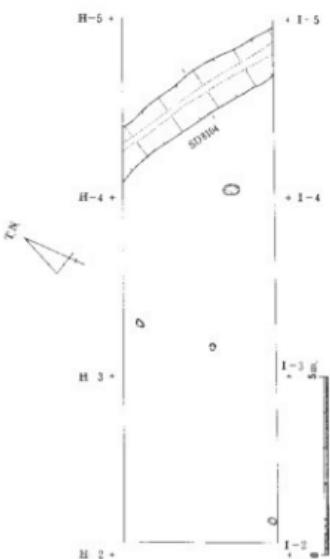
環濠と考えられる3本の溝の中で西に位置し、最も広い範囲で確認した。調査の東南部から西北部へとゆるやかなカーブを描く。地下げのためC・D列以外は遺構面より10cm程削平され、D列も一部擾乱を受けている。残存状況の良い箇所で幅6.5m、深さ0.8m程を計る。溝は西北部が東南部より10cm程深くなっている。溝の断面は階段状を呈している。側面に平坦部があり、基本的に2段になっているが、D-6区を中心として溝の北側面にさらに長さ11m程にわたって平



第3図 調査区北部遺構実測図



第4図 調査区南部構造実測図



第5図 調査区西部遺構実測図

垣面が削出されている。そのためD-6区の南北側面は3段になって底に連なる。

溝の底部には地山である黄褐色砂質土層を削り出すことで形成された駐状の高まりが設けられている。一部未調査の区画があるが、この駐状の高まりはG-10区からD-6区まで溝の底中央部を走る。D-6区で分岐し、溝北側面の下位平坦面の東部の凹みにつながる。駐状の高まりが位置するD-6区の溝の底は他よりさらに20～30cm程深くなっている。

駐状の高まりと一段深くなった溝の底部は留水を区画するための施設で、対応する4段になった溝の側面は区画された溝底に降りる施設としての機能を有するものとも考えられる。

D-5区からE-7区にかけて底面南面に、30～40cm程の間隔で並ぶ小穴を検出した。溝の側面が安定した土層からなっていることや、駐状の高まりと対応する部分が多いこと及び集落内部側と考えられる配置から棚列になる可能性が高い。

4. 他の遺構

今回の調査区ではSD8105より西に、環濠と考えられるような規模を有する溝は存在しない。51年度調査結果を考慮すればSD8105の南西部が環濠に囲まれた区域にあたると考えられる。事実多数の土壌が検出されたが、すでに削平を受けており遺構の残存状況は良くない。

SK8117 E-6区において検出した土壌で、短軸75cm、長軸は現状で1.2cmを計る卵形の長方形を呈する。削平のため上部が消失しており、現状で5cm程の深さを計る。土器片と炭化物の細粒を多く含む。周辺に柱穴と考えられる土壤がある。

SK8125 F-6区において検出した土壌である。短軸65cm、長軸2.5mを計る。削平のため特に西部は苦しく旧状を損っている。土器片と炭化部の細粒を多く含む。周辺に柱穴状の土壤がある。

SK8105～SK8110 H-5・6、I-6区で検出した土壌で土器片と炭化物の細粒を含む。

SK8110 は隅丸長方形を呈するが、他は円形のものである。削平のためいずれも遺構上面は消失している。

SK8152～SK8154 I-10区で検出した直徑10 cm 程の土壌で1.5 m 程の間隔で一方向に並ぶ。大半は削平されていると考えられる非常に浅いものである。柵列になる可能性が高い。

SD8105 H-4区で検出した溝である。断面は上部が開いた台形状を呈する。上面幅1 m, 底面幅10 cm, 深さ70 cm 程を計る。他の遺構と異なり地山と同様な黄褐色の砂質土が埋土のかなりの部分を占め人為的に埋められた可能性が高い。

調査区の東南部から北西部にかけて検出した3本の溝はいずれも規模が大きく、カーブを描いて平行に走る。昭和51年度調査区において検出された溝もほぼ同規模のものであり、今回検出した溝と関連しあって集落の周囲をめぐる環濠となる可能性が高い。3本の環濠と考えられる溝はその間隔も等しく平行に走る。互いを意識した配置とすることができ、それほどの時間差があるとは考えにくい。

しかし各溝から出土した遺物には時期差が認められる。先後関係をまとめれば次のようになる。

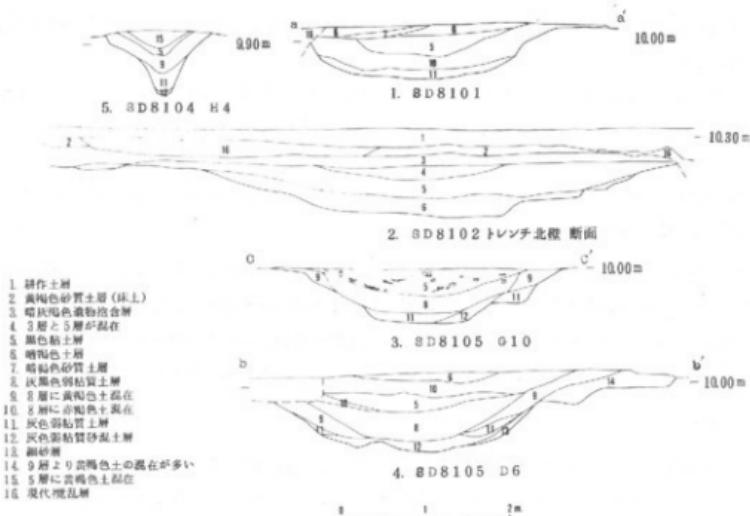
S D 8 1 0 1 → S D 8 1 0 2 → S D 8 1 0 5

SD8101 には溝の排棄に伴う祭祀が行われたと思われる配石遺構があることも考え合わせると、古い溝が完全に埋没する前に前記の順で新たに溝が掘られたのであろう。

各溝にはその形態において差異が認められる。SD8101 が上部の大きさで開いた「U」字形の断面形を呈するのに対して、時期的に後出する SD8102, SD8105 は階段状の断面を呈する。特にSD8105 は底部に溜水を区画するような施設をもち、それと対応するように断面が階段状を呈している。溝内へ進入する施設となる可能性も考えられる。またSD8105 の底の南寄りには杭列もしくは柵列と考えられる小ピットが並ぶ。これらは環濠の機能などを考える上で重要なものである。

環濠の南西部は削平により大半の遺構が上部を消失した状況で検出された。SK8117やSK8125などのように炭化物の粒子と土器小片を多く含むやや大きめの長方形の土壌を検出したが、周囲に柱穴状のピットが配置されているものもあり住居跡の上部が消失したものと考えられる。またSD8104以西には住居跡と考えられる遺構は検出できなかったが、付近の現状から旧地形は南西部の方が標高はやや高かったと推定され、削平により遺構の残存度がより悪いことも充分考えられる。

遺構の解説の都合上、すでに一部述べたが、改めて昭和51年度の調査成果と今回の調査結果の関連について記述したい。51年度調査地区は今回調査した地区のすぐ南に接しており、現状は水田である。調査区が3ヶ所設定された。西に位置する調査区から規模の大きな溝が2本南東から北西の方向を有して検出され、東に位置する調査区からは溝の一部と考えられる遺構が検出されている。東の調査区の遺構はSX7601と称され、大きく西にカーブして、今回のSD8105に連なる。西の調査区の溝も複数と複数平行して走ることなどから今回の3本の環濠のいずれかと関連する可能性がある。今回の調査においてH-10区でSD8105が検出され、H-9区からH-2区までの約40 m の間は環濠は存在しない。51年度調査の西調査区の溝とE-7区のSD8105はほぼ平行する。その間隔は60



第6図 満断面土層図



第7図 SD8101上層部配石遺構実測図

m弱を計る。今回の調査地区で最も西に位置するのがH-2区で、51年度の西調査区のSD7601とは直線距離で24m程離れており、その間は未調査であるが、現状では南北間約60mを計る環濠集落である可能性が高い。東西方向の規模は未調査のため不明である。

III. 遺 物

今回の調査区で遺物が量的にまとまって出土した遺構は調査区の北部から東部において検出した環濠と考えられる3本の溝である。他の 土 壤などの遺構から出した遺物は量的にも少く、残存状況も良くない。環濠の中で最も古い時期と考えられるSD8101と検出した面積も広く、遺物量も多いSD8105から出土した土器を中心に報告したい。

1. SD8101出土土器

SD8101は3本の環濠と考えられる溝の中央を走るものである。溝中の埋土は暗褐色～黒色の粘質土であり、北部の一段深くなった部分の最下部以外では砂層は認められない。遺物の包含状況、土層からみてそれほど明瞭に分層できず、調査区の北部で砂層とその上層に分層して遺物を取り上げた。

壺形土器（第13図）

1・2、頸部に接合時の段を残すものである。1は段の部分をヘラにより整え、2は段の上位にヘラによる浅い沈線を1条めぐらせるものである。3～6、削り出し突帯を頸部にもつものである。3は口縁端部に1条のヘラによる沈線がめぐる点で1の段を有する土器と共に通している。5はやや口頭部が外反気味に発達し、耳状の2孔を有する貼付けの突起がつく。突帯の残りが悪い3をのぞき、いずれも突帯部は内傾し、それほど長頭化はしていない。7～11、頸部にヘラによる沈線がめぐるもので、沈線数が少いものを除き、沈線部は内傾している。口頭部は発達していない。12、配石遺構内で検出したほぼ完形の壺である。爪による刻み目を有する貼付突帯をもつ。口頭部は発達し、胴が張り、やや上底気味の底部をもつ。13、肩部と頸部にヘラによる平行沈線が多数走る。頸部の沈線文帯の幅は広く、外反気味のもので口頭部も発達している。14、頸部に貼付突帯をもつ。突帯部は外反しており、長頭のものである。15、口縁内面に貼付突帯を有する両方系の土器である。16、矧く外反する口縁部をもつ小形の壺で1孔を有する。17～19、肩部の破片である。17は沈線による文様をもつ。連弧文か山形文であろう。

壺形土器（第14図 1～10）

1～6、如意状口縁の壺であり、2～5条のヘラによる平行沈線がめぐる。口縁端部には刻み目がつく。5と6には山形の沈線文が平行沈線間に施される。SD8105で出土した同様の文様をもった壺は貼付口縁であることは注目される。7～9、貼付により、口縁部が形成されている。7、8は口縁上面が水平で、断面形は三角形状を呈する。10、直口の壺で口縁下部に刻み目をもつ貼付突帯を有する。

壺形土器（第14図 11、12）

11、壺の蓋で、中央部に孔を有する。12、壺の蓋で、中央部はつまみ状になる。

土製品（第14図 13）

13，土製の訪錠車で、円板状を呈する。中央部に焼成前の穿孔を有する。

2. SD8105出土土器

SD8105は3本の環濠と考えられる溝の中で西に位置するものである。埋土は有機分を含んだ粘質土層であるが、色調により3層に大別できる。3層に分層して検出した遺物の中で、上層と中層の遺物を報告する。

中層出土土器

第6図のSD8105の土層中の第8・9層が中心となる。

壺形土器（第15図、第16図1～7）

第15図 1，頸部に接合痕の段を残すもので口縁部は短く外反する。2・3，削り出し突帯を有する。頸に施された削り出し突帯部は内傾・直立気味で、口頸部は発達している。4～6，頸部にヘラによる平行沈線を有する。口頸部が短く外反するもの（5）と大きく聞くもの（4・6）がある。7，無文の壺であるが、体部に比して口頸部が発達し、長頸化している。

第16図 1～3，内面に貼付突帯を有する阿方系の壺である。いずれも口頸部がかなり発達しており、1では頸部に12条のヘラによる沈線が走り、沈線部は外反する。4～7，貼付突帯を頸部外面に有する。いずれもかなり長頸化している。

壺形土器（第16図 8～11）

8・9，如意状口縁の壺である。10，上面が平坦な貼付口縁の壺である。11，口縁端部のやや下位に刻み目を有した貼付突帯を有する。

高杯形土器（第16図 12）

内外面ともに剥落が著しく、口縁端部は短く外反する。

上層出土土器

第6図のSD8105の土層の中で第5層より上部から出土したものである。

壺形土器（第17・18・19図）

第17図 1，頸部に削り出し突帯を有し、2孔を有する耳状の貼付突起がつく。2～5，頸部外面にヘラによる平行沈線を有するものである。内傾する沈線部を有し、大きく外反する短い口縁を有するもの（2），沈線数も少く、長頸化もそれほど認められない古手のもの（4）と長頸化したもの（3），多状の沈線を有するもの（5）がある。

第18図 1～4，頸部外画のヘラによる沈線の多条化と沈線帯の外反化が進んだものである。5，口縁端部が肥厚化するもの。6・7，無文の面で、長頸化したもの（6）がある。8～11，口縁内面に貼付突端を有する阿方系のもので、突端が渦巻状に文様化したもの（8），外面に沈線だけでなく貼付突帯がつくもの（9，11）があり、いずれも口縁部の発達と長頸化が認められる。12・13，頸部に貼付突帯をもつ壺であり、器形は類似している。13は肩部にヘラによる平行

沈線がめぐる。

第19図 1～7, いずれも貼付突帯を行する壺である。頸部は長頸化している。2は突帯を貼付する前に沈線をめぐらせ、7は突帯間に沈線を施す。8, 脚下部に焼成後の2穿孔を有する壺で頸部と脚部間に接合時の段を残す。他と異なり胎土に黒色の光耀を有する鉱物粒を含む。

彫形土器(第20図, 第21図 1～7)

第20図 1～6, 如意状の口縁を呈する壺で、ヘラによる平行な沈線をもつ。7～11, 上面が平坦な貼付口縁をもち、無文のもの(6)をのぞき沈線数も多い。山形文を有する壺はSD8101では如意状口縁であったのに対して、SD8105では貼付口縁であることは注目される。12, 口縁端部が下った断面三角形の貼付口縁のものである。

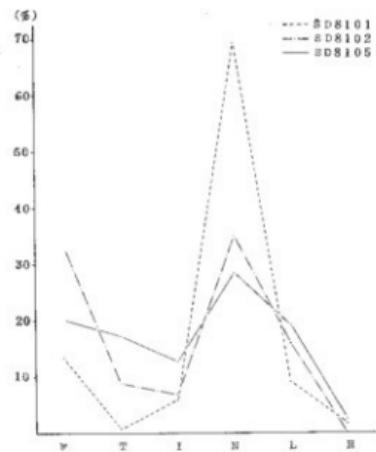
第21図 1～4, 口縁端部が下った断面三角形の貼付口縁の壺である。施された沈線はヘラによっている。5・6, 檜状の器具で数状を単位とした平行沈線文を有する貼付口縁の壺である。6は4条の櫛状の器具を用いて施文している。7, 直立する口縁下部に貼付の突帯を持ち、口縁端を突帯の先端には刻み目を有する。ヘラによる平行沈線を施される。

他の器種(第21図 8～10)

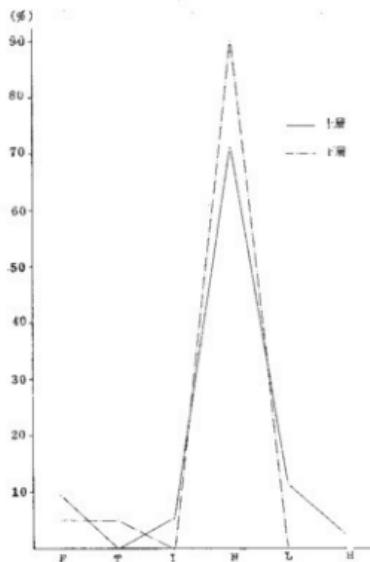
8, 高杯の杯部と考えられる。中層で出土したもの(第16図 12)と比較して、口縁部が長く伸びるものである。9, 壺の蓋。10, 壺の蓋である。

以上遺物量に恵まれたSD8101, SD8105の2本の環濠出土土器を図化した。この2本の溝は今回検出した遺構中最も時期があるものの一つと考えられる。しかし3本の環濠は同じ方向と間隔及び規模を有しており、それほどの時間差を有しているとは考えられない。また出土した個々の遺物を見れば、遺構を越えて同様な形態を有するものが多く認められるなど共通する様相がある。近接した時期の遺構、遺物の変遷の方向性などを明確にするためには、遺構毎の遺物の総体を比較する必要があろう。まず層位的に遺物量に恵まれたSD8105において、遺物の変遷の方向性をみてみたい。

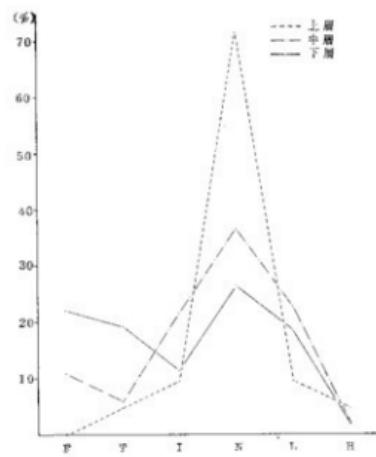
第8～10図は口縁形態の差により、分類した壺の構成比を図化したものである。図中の記号はその形態を示す。N: いわゆる如意状口縁を有するもの。F: 貼付口縁で上面が水平になっており、端部で薄くなるもの。L: 貼付口縁で上面が水平で基部と端部に厚みの差がないもの。T: 貼付口縁で、口縁端部が下っており、断面三角形状のもの。H: 直立する口縁で、直下に貼付突帯を有するもの。I: 口縁下部が内傾するもの。以上6類に分類した。大別すれば如意状口縁の壺と貼付口縁を基調とする壺となる。貼付口縁のF・L・Tの各形態の中には明確に位置付けにくいものもあり、図中の比率はやや幅を有しております、一つの傾向を示していると考えていただきたい。また出土した土器の大半が破片であるため個体数を正確に割り出すことが問題となる。ここでは数量適正化の方法として、残存度を $\frac{1}{2}$ で表現し、 $\frac{1}{2}$ を1単位として集計した。口縁部が完全なるものは8単位となる。



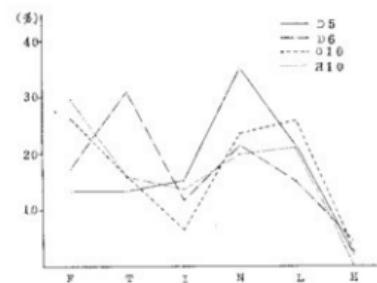
第8図 壺口縁形態別構成比図



SD8101
壺口縁形態別構成比図



SD8105
壺口縁形態別構成比図



SD8105 上層
壺口縁形態別構成比図

SD8105 は 3 層に埋土を大別して遺物を取り上げた。第10図は各層位毎の壺の構成比を表している。総単位は 1236 を数え、155 個体以上の点数となる。下層出土の壺において、如意状口縁を有するものは 71% を占めるものに対して、中層においては 36%，上層では 26% とその比率は小さくなっている。ただ各遺物包含層には無遺物層は形成されていらず、多少の誤差は含まれるが、如意状口縁の壺の激減と貼付口縁の壺の様相の変化の傾向とすることができよう。

第 8 図は 3 本の環濠から出土した壺の口縁形態の構成比を図化したものである。SD8101 では如意状口縁を有するものが 68% を占めるのに対して、SD8102 では 35%，SD8105 では 28% を占める。如意状口縁の減少傾向の中、

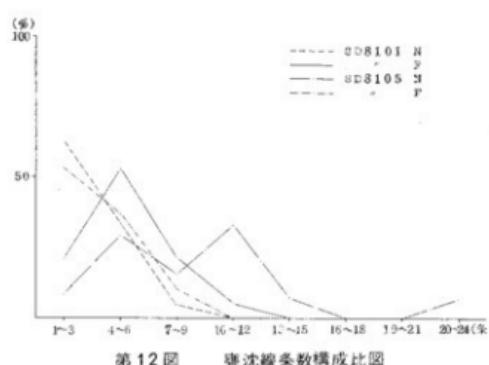
S D 8 1 0 1 → (S D 8 1 0 2) → S D 8 1 0 5

の先後関係があるとすることができよう。ただ SD8102 は遺物の量が少なく SD8105 との先後関係は明瞭ではない。ただ如意状口縁の比率が高いことから SD8105 と一部時期的に重なりながらも先行する可能性が高いと考えられる。

SD8101 と SD8105 の間には時期差があることが明らかになった。壺には貼付口縁の比率増加とともに、沈線文の条数の増加傾向が認められる。第12図は如意状口縁と上面が平坦な貼付口縁の壺に施された沈線文の条数の変化を図化したものである。如意状口縁と貼付口縁では後者の方が条数が多い。またいずれも SD8101 より SD8105 出土のものの方が沈線文の条数は増加している。特に SD8105 の上層出土の貼付口縁の壺には 4 ~ 5 条を単位とした櫛状の施文具を用いて合計 20 条以上の沈線文を描くものが出現することや、SD8101 では如意状口縁の壺に施されていたヘラ描沈線による山形文が SD8105 では貼付口縁の壺の文様として用いられるなど新しい時期的特徴が認められる。

一方、壺においては SD8101, SD8105 のいずれの環濠からも口頭部に段を有するものや削り出し突帯を有するもの、沈線もしくは貼付突帯を有するものなどが出土した。しかし量や質の面で各環濠の置物には差が認められるようである。出現時期が最も古く位置付けられる接合時の段を残す壺は量的に非常に少なく検出した構造より古い時期の所産である可能性も否定できないが、削り出し突帯へ

移行する傾向が認められるものも SD8101 から出土している。また大半が口頭部の破片であるのに対して、SD8105 の上層出土のものは頭部から底部にかけて残存するもので、頭部と脚部の土壤に接合時の段を残す。他とは異なり脚部下間に焼成後の穿孔を有し、日常土器とは違う様相も認



第 12 図 壺沈線条数構成比図

境に接合時の段を残す。他とは異なり胴部下半に焼成後の穿孔を有し、日常土器とは違う様相も認められる。また胎土も黒色の光沢をもつ鉱物を含むなどの特徴をもつ。

復原作業を完了しておらず器形変化を充分に明らかにできないが、SD8101 から SD8105 の壺は長頸化と口縁部の発達で理解できよう。削り出し突帯を有するものは SD8105 では頸部が直立したものや口縁部が大きく外反するなど新しい様相を呈してくる。沈線文を有するものも SD8101 から SD8105 への変化では長頸化に伴う頸部の直立化と口縁部の外反が認められるが、前出の新しい器形的特徴を有するものも存在するなどの過渡期の相様がうかがわれる。外面に貼付突帯を有する壺は SD8101 では上層に一部認められるだけで非常に限られているのに対して SD8105 では量的に増加する。いずれも頸部は長頸化しているものである。また SD8105 出土の面には突帯を貼付するのに先だって沈線を施すものもある。

壺の長頸化と口縁部の外反に伴い口縁部外面に施される文様帯もその様相が異ってくる。SD8101 出土の壺の口縁部の文様帯は、上層出土の一部のものを除き、上部が内傾もしくは直立する。これに対して SD8105 出土のものは直立または外反しているものが多くなる。削り出し突帯はほとんど上部が内傾しているものに対して、貼付突帯のものは直立もしくは外反している。沈線文のものは両者が認められる。また口縁内部に貼付突帯を有した阿方系の壺も SD8101, SD8105 の両溝から出土しているが、後者から出土したものの方が文様が発達し複雑化している。

また壺・壺以外の土器・土製品として高杯、蓋、紡錘車、土鍾などが出土しており器種的にも比較的恵まれている。

今回写真でしか報告できなかったが、石器類もかなりの点数が出土している。器種として石庖丁、石斧、石鎌、石錐、スクレイパー、石鍬もしくは石斧の未成品、凹み石、叩き石及び砥石が出土している。石庖丁には片岩系の石材を用いた磨製のものと、サヌカイト質の打製のものがある。また石斧には始刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧がありいずれも結晶片岩系の石材を用いているのに対して、石鍬もしくは石斧の未成品と考えられるものは硬質の砂岩系の石材を用いている。石鎌、石錐にはサヌカイトが用いられている。

N. まとめにかえて

今回の池遺跡の発掘調査では環濠と考えられる3本の溝と、溝に囲まれた集落の内部と考えられる区域から多数のビット及び小規模な溝が検出された。調査区の北部は遺構面上に遺物包含層があり、遺構の残存状況は比較的良好であるが、調査区の南部は近現代の地下げによる削平を全面にわたって受けしており、遺構の上半部は消失している。おそらく旧地形では南部の方が比較的にも高い地形を呈していたことが考えられる。

検出された3本の環濠と考えられる溝はいずれも同程度の規模と方向を有しており、また遺物からみても共通する要素を有する土器が各溝から検出されるなど機能的にも時期的にも近接したものであることがうかがわれる。中央を走る環濠を除き東西の環濠はその側面が段をなしており、共通した特徴を有する。また中央の環濠の最上層には完形の土器を伴った配石遺構があり、溝の廃絶に伴う祭祇遺構と考えられる。出土した遺物の変化の方向性から、中央の環濠（SD8101）から東側の環濠（SD8102）、西側の環濠（SD8105）の順序で使用され、埋没したことかがわれる。環濠の中でSD8105は最も広い面積で確認された。底部には駐状の削り残しの部分が溝と平行して走り、留水を区画するための施設とも考えられる。対応するように北東の側面は階段状になっており、西南側の底面には杭列もしくは柵列と考えられる小ビットが30cmの間隔で一列に並んでいる。これら3本の環濠内の堆積には砂層が含まれていず、非常にねだやかな堆積状況が推測される。

中の池遺跡の今回の調査成果の一つとして出土した多量の遺物があげられる。遺物の質・量に恵まれた遺構として環濠がある。環濠はその検出状況からしても近接した時期の所産である可能性がうかがわれたが、包含された土器にも近接した様相が認められる。ただ量的に遺物を比較すると器種内における形態毎の占有率の差があり、先後関係が認められる。

変形土器では如意状口縁のものがSD8101とSD8105の下層では70%程を占めるのに対して、SD8105の上層では25%程に減少する。また特に貼付口縁のものでは口縁直下の外面に施される沈線の多条化の傾向が認められる。10条未満のものがSD8101では95%程を占めるのに対してSD8105では約53%に減少し、特に10~12条のものが5%から33%に増加する。この傾向は如意状口縁のものにも影響を与える、SD8101では3条以下のものが63%を占めるのに対してSD8105では53%にまで減少する。またSD8105の上層では描写沈線文を有した貼付口縁の器が出土した。4条を単位とした極状の施文具で24状の沈線を施す。これはヘラ描沈線の多状化による施文範囲の拡大の結果として出現するのであろう。

壺形土器ではSD8101、SD8105のいずれの環濠からも成形の際の段を残すもの、削り出し突縁、ヘラ描沈線、貼付突縫を有するものが出土している。ただ有段のものは量的に非常に少く、いずれも小片である。SD8101からSD8105への移行による壺の変化は長頸化による施文域の拡大ということで理解される。必ずしも削り出し突縫であるからといって古い形態を有していると

は限らず、沈線文を施す壺にも削り出し突帯を有する壺よりも古いプロポーションを有するものがある。しかしそれでも貼付突帯を有する壺は削り出し突帯の壺より長頸化は進んでいるものが多い。最も新しい時期と考えられるSD8105の上層においても、壺にはまだ櫛を施文原体としては用いておらず、沈線文は全て墨を使用している。口縁部内面に貼付突帯を有する阿方系の壺はSD8101の上層の段階から出現し、SD8105出土のもののように幾重にも縦巻くなど文様的に複雑化する傾向を有しているようである。

今回の調査で出土した土器の様相変遷を大きくとらえれば壺における如意状口縁の比率の低下、文様帯の拡大と櫛描文の出現、壺では器形に様々な系譜の存在を推察させるバラエティーが出現することや長頸化に伴う施文域の拡大が認められる。壺ではまだ櫛を用いた沈線文は出現しない。壺において使用されはじめる櫛描文が壺にも遅れて使用されるようになっていくと考えられる。

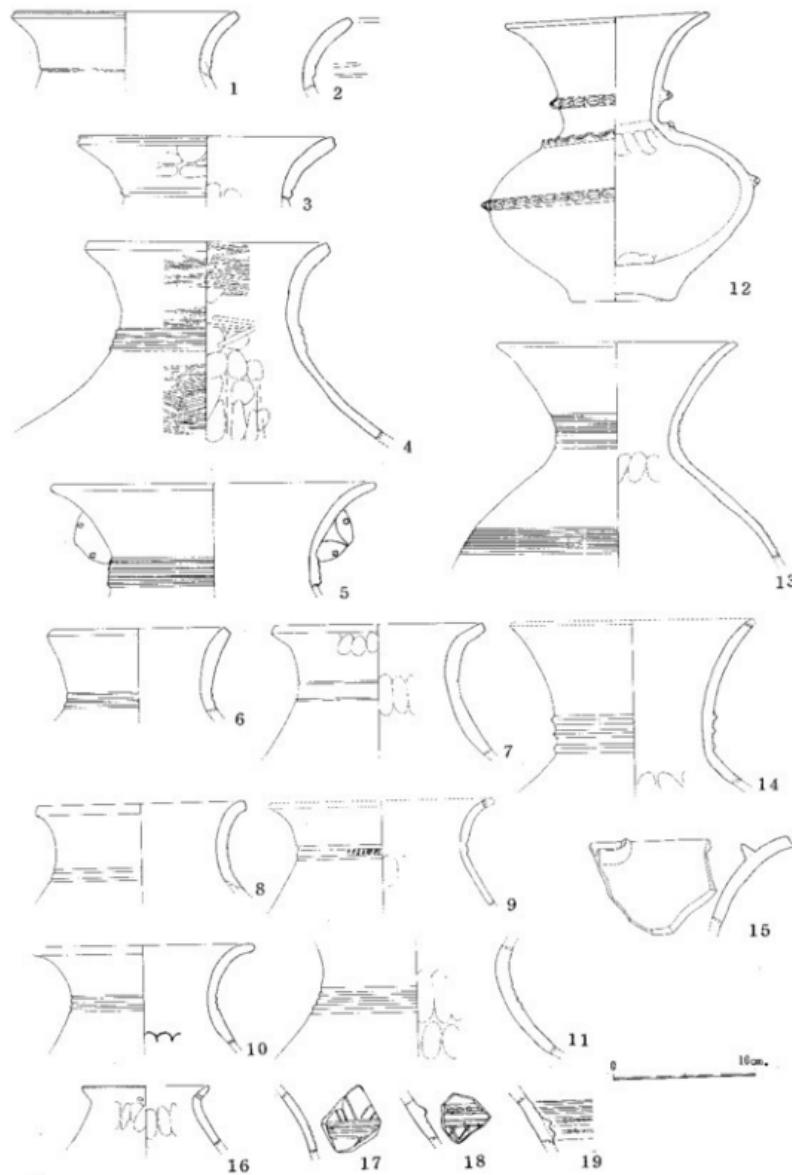
中の池遺跡に代表される県下の内陸部の遺跡においては、壺に成形時の段を残すものが主体を占める時期の遺構や遺跡がまだ認められず、坂出市大浦浜遺跡や観音寺市室本遺跡など島嶼部や後背湿地に恵まれた海岸部の遺跡より後出する時期に比定されるものばかりである。大浦浜遺跡や室本遺跡と中の池に代表される内陸部の弥生前期の遺跡との関係や中の池遺跡・善通寺市五条遺跡・多度津町三井遺跡など前期末までしか継続しない遺跡群に遙く弥生中期の様相などまだ不明な点が多い。そうした設置の弥生前期の様相の中で確実に遺構から検出され前期後半から末の時期に編年上の定点を与える好資料である中の池遺跡の有する意義は大きい。

註1 昭和51年度の調査成果と総合して考え合わせると今回の調査区の西南部を中心を有するような楕円形を描いてめぐると思われる。また構内の堆積状況は黒色ないしは暗褐色の粘土がほとんどで砂層が形成されていないなど非常におだやかに埋没したことことが窺われる。

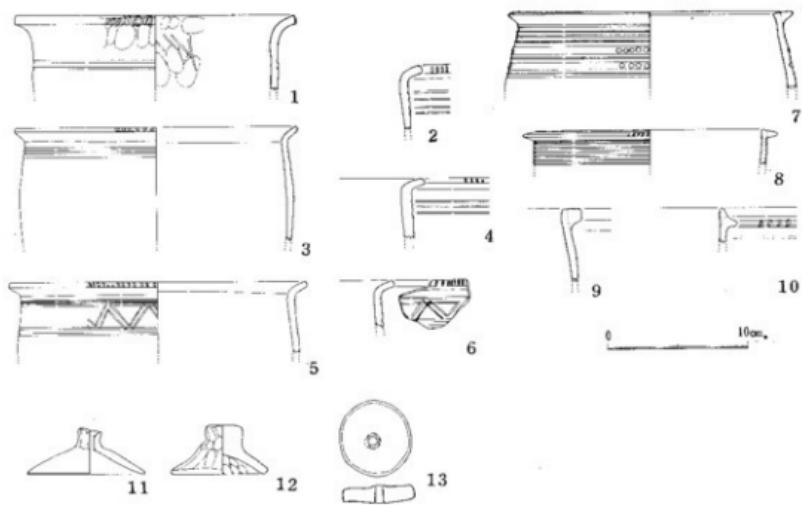
註2 時期的には後出するものであるが善通寺市善通寺西遺跡の同規模の構の最上層に5世紀前半代の小形丸底壺を並べた祭壇遺構例がある。

註3 非常に近接した時期の遺構の先後関係の解明には規準を統一した遺物の量的な比較以外には遺物からは決定できないであろう。

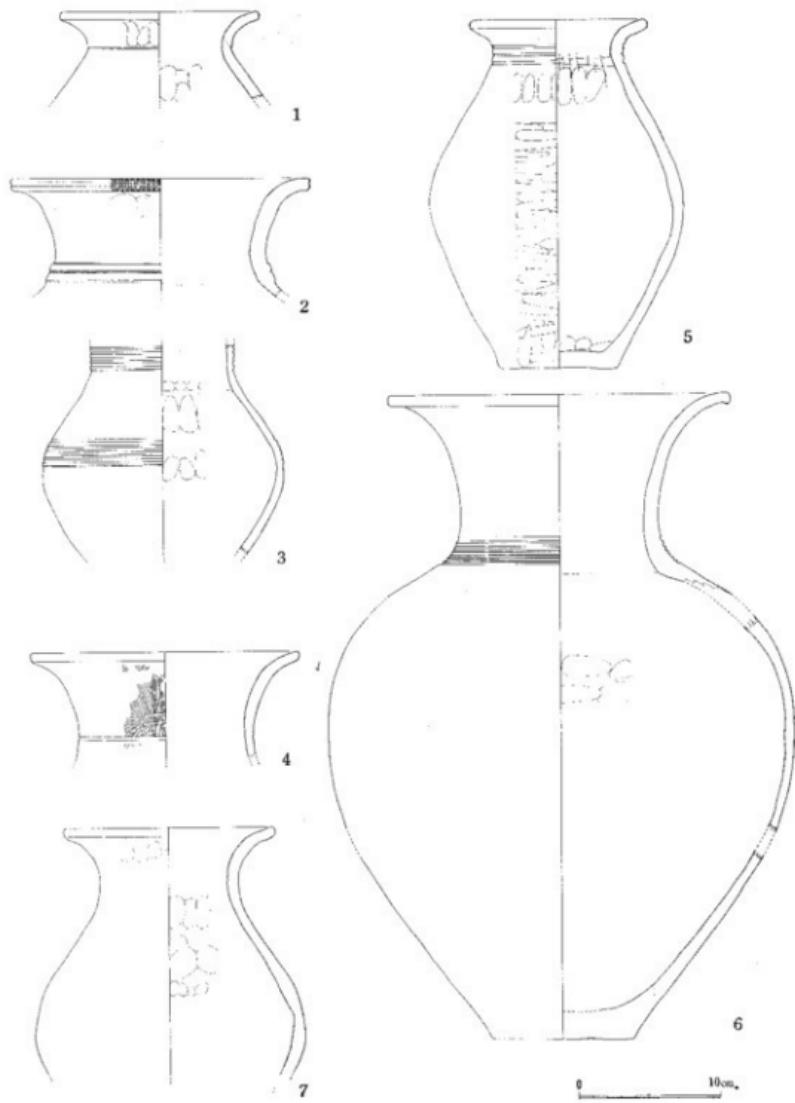
註4 壺内弥生式土器編年を用いれば第二様式は壺形土器における櫛描文の出現をもって始まるとしてある。中の池遺跡においては雖に櫛描文は出現するが、壺にはまだ櫛描文は施されていない。前期後半から末の時期に中の池遺跡の深層の時期は比定されるであろう。



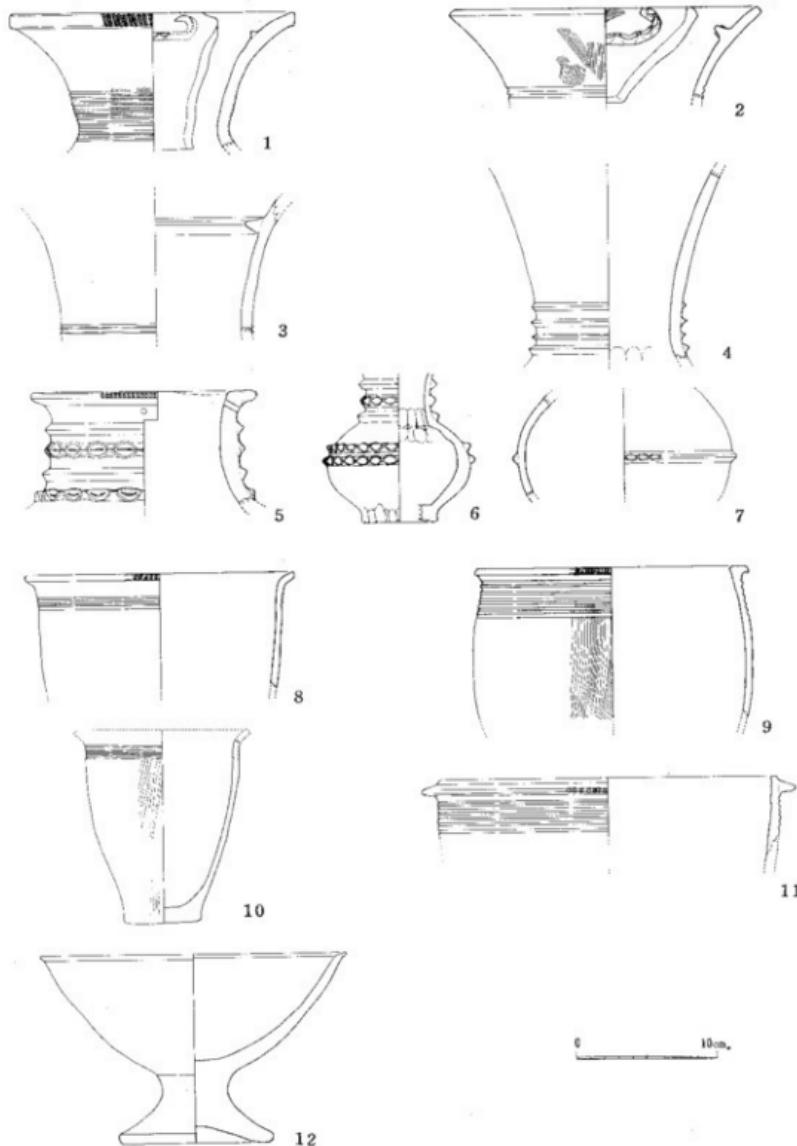
第13図 SD8101出土土器実測図



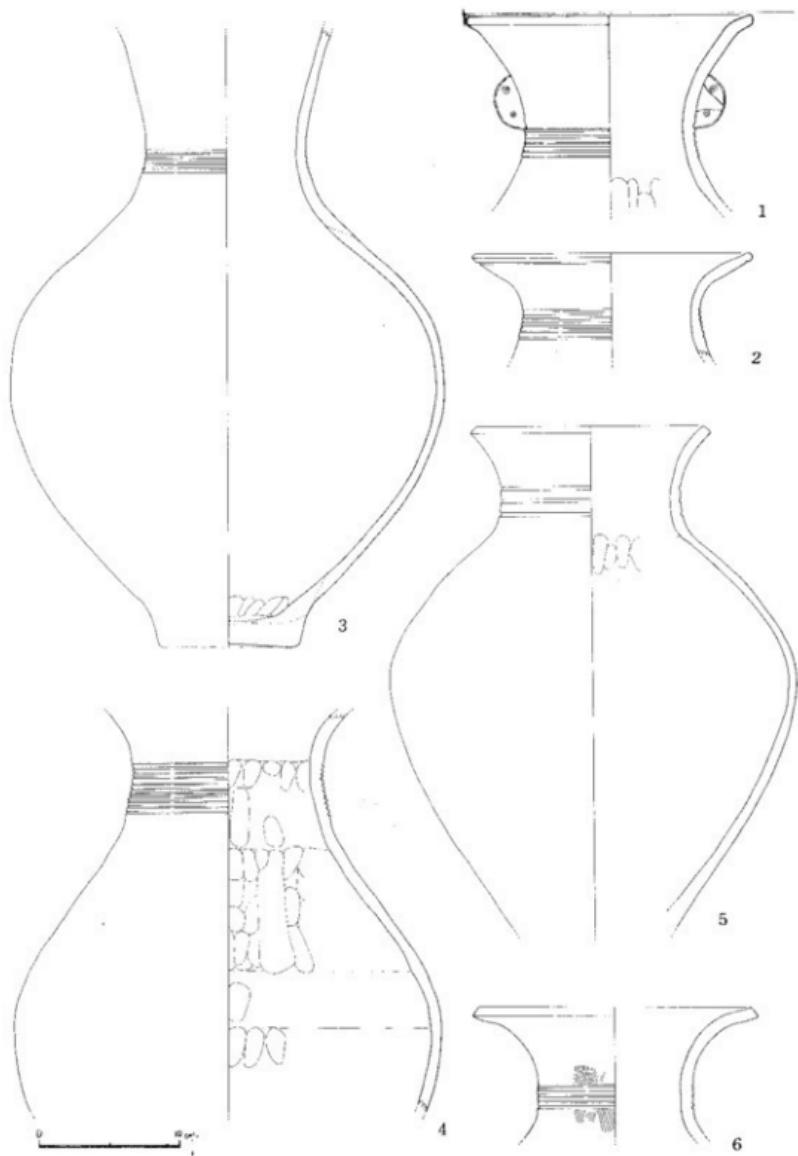
第14図 SD8101出土土器実測図



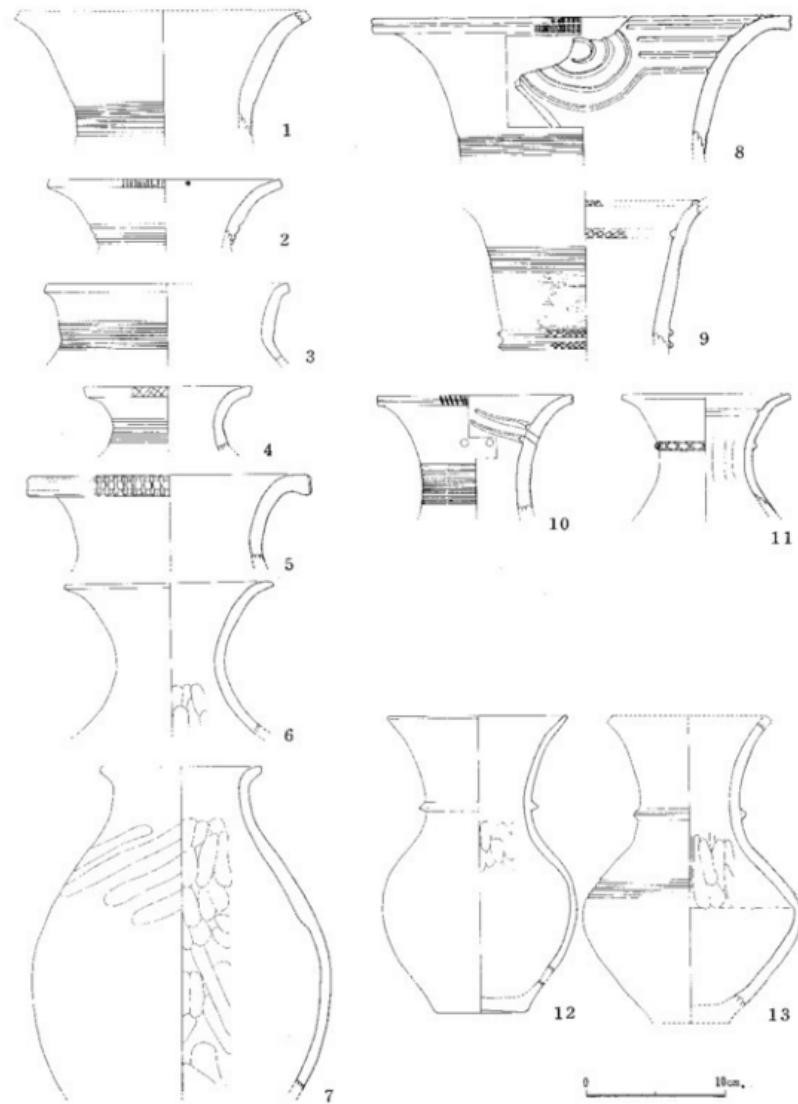
第15図 SD8105出土土器実測図



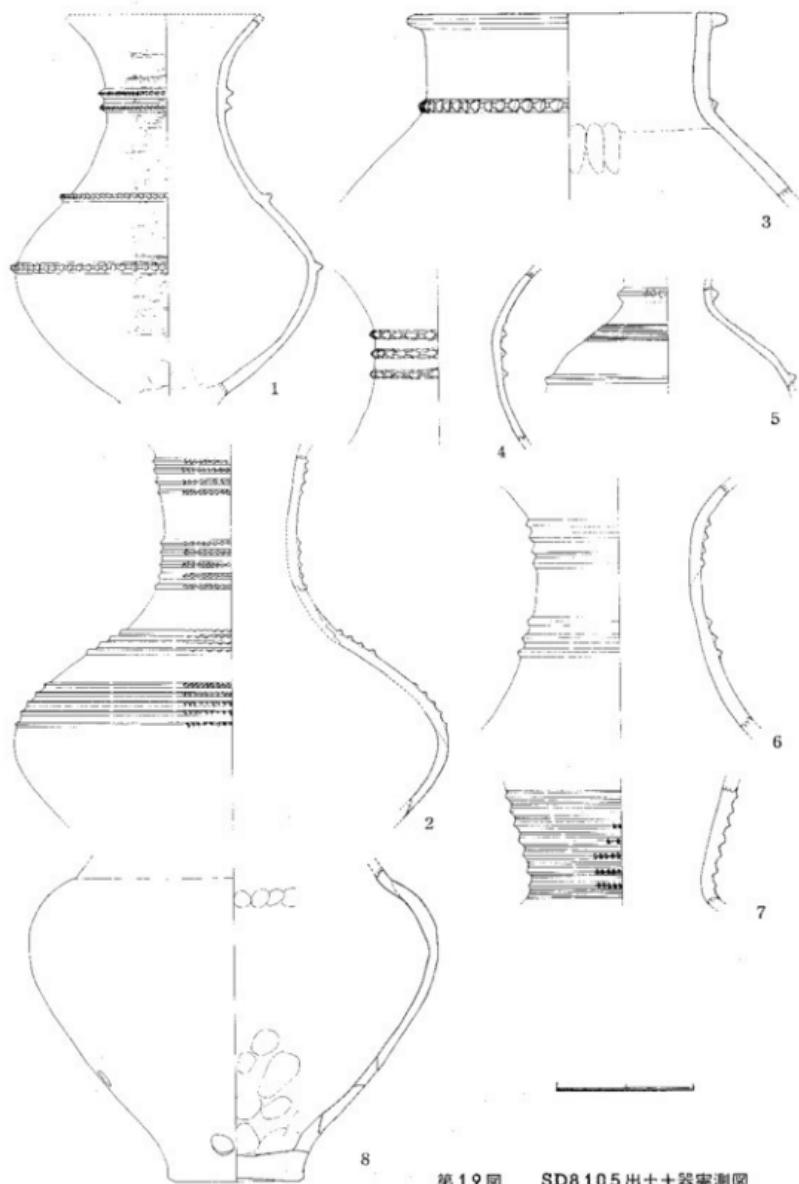
第16図 SD8 105 出土土器実測図



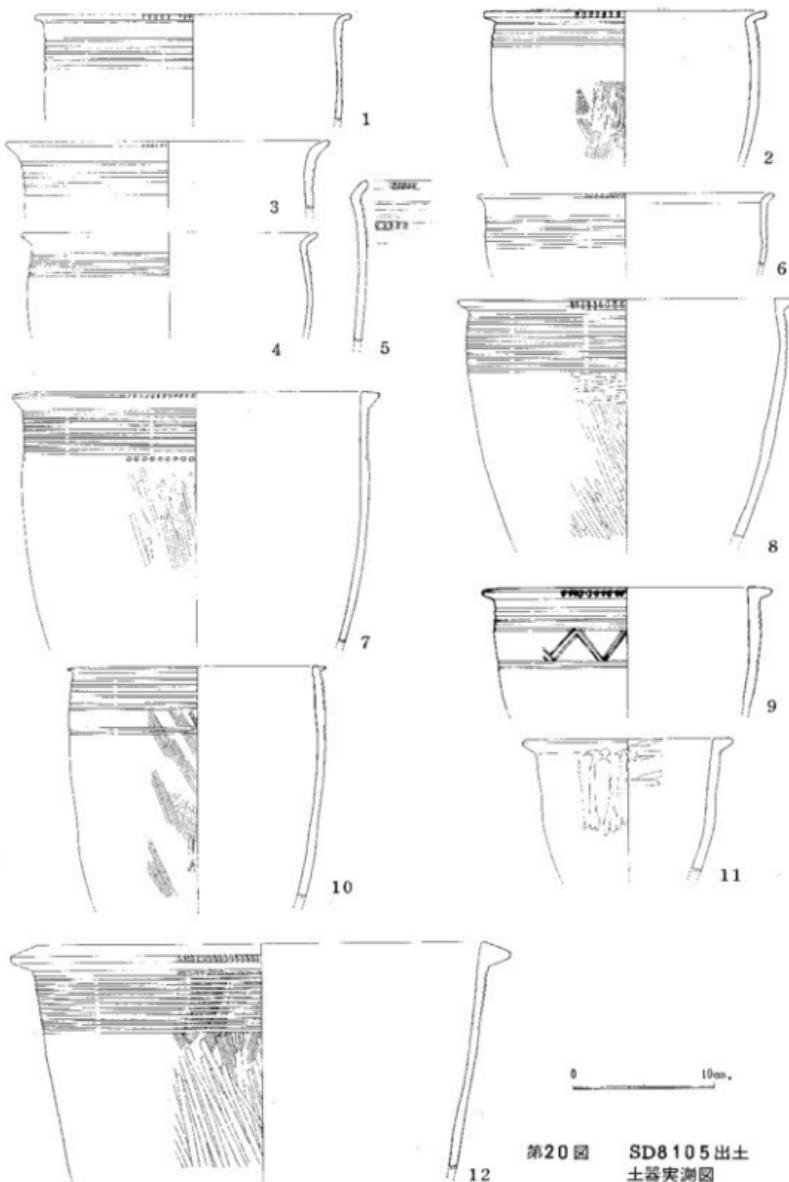
第17図 SD8105出土土器実測図



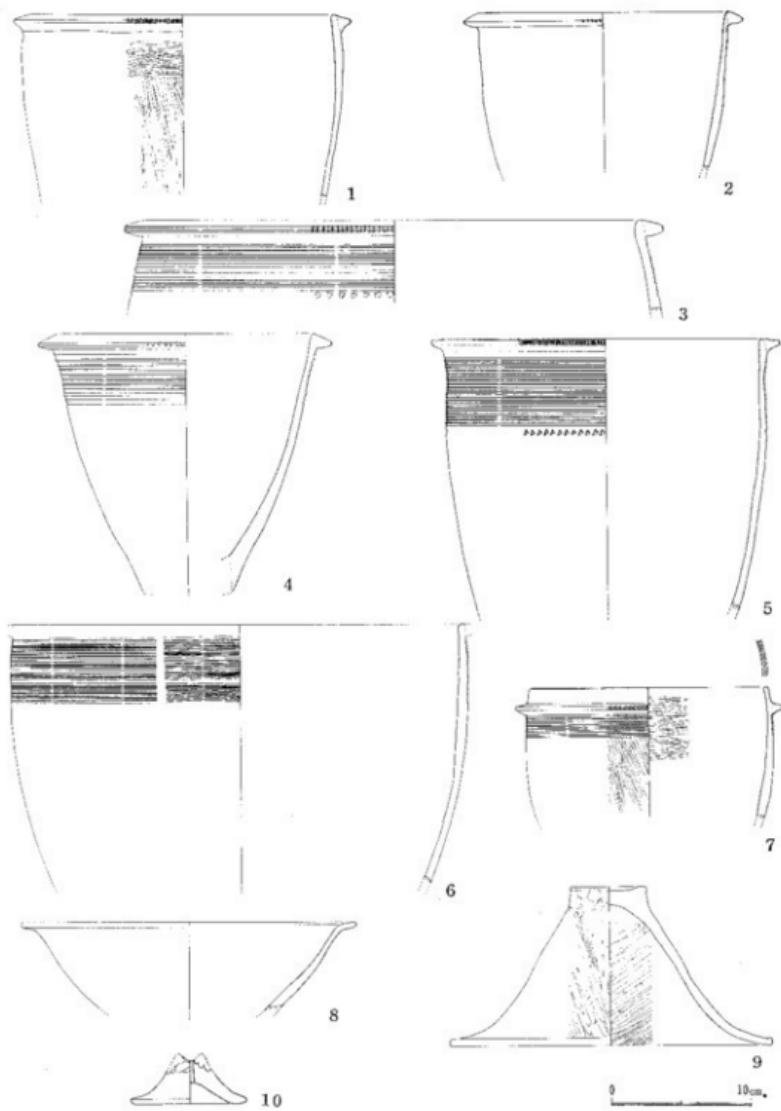
第18図 SD8105出土土器実測図



第19圖 SD8105出土土器実測図

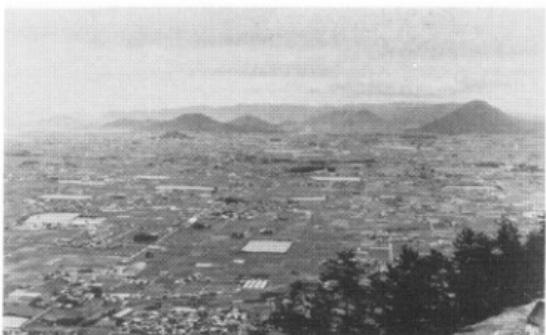


第20図 SD8105出土
土器実測図



第21図 SD8105出土土器実測図

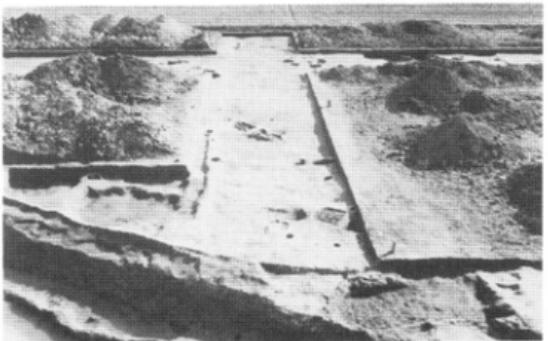
中の池遺跡遠景
(西方、天霧山から)



C・D列(西から)



6列(北から)



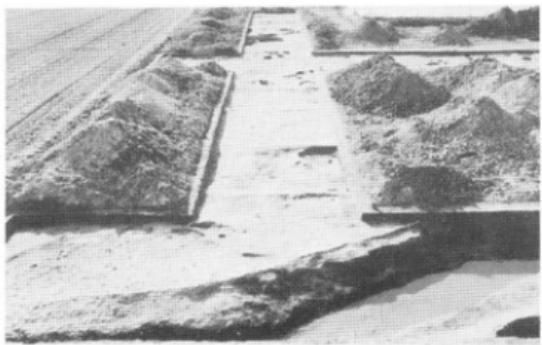
図版 2



10列(北から)



10列(南から)



H列(東から)



SD 8101(北西から)



SD 8101・D8配石造構全景
(北西から)



SD 8101・D8・配石造構内
臺出状況(北東から)

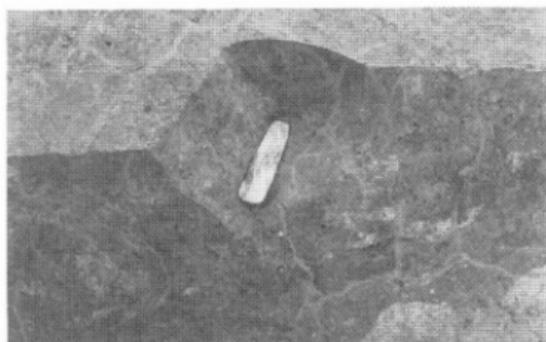
図版 4



S D 8101・D 8・土層断面
(北西から)



S D 8102 (南東から)



S D 8102・D 10・蛤刃石斧
出土状況(北から)

図版 5

S D 8105・C5～E7
(北西から)



S D 8105・C5～E7
(北北西から)



S D 8105・C5～E7
(東から)



図版6



SD 8105・D6・土層断面
(南東から)



SD 8105・G10(南東から)



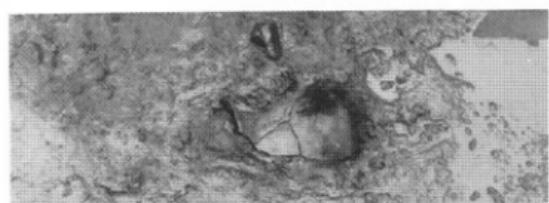
SD 8105・G10・土層断面
(南南東から)



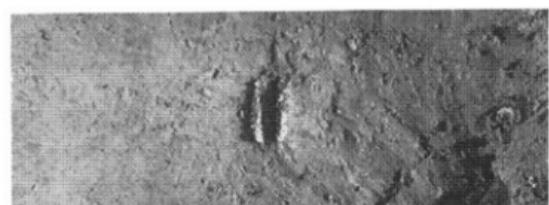
SD 8105 · E7 · 遺物出土状況
(北西から)



SD 8105 · C5 · 遺物出土状況
(東から)



SD 8105 · D6 · 遺物出土状況
(北から)



SD 8105 · E7 · 獣下がく骨
出土状況

図版 8



SD 8105・G10・確認検出
状況（南東から）



SD 8105・H10・発出状況
(西から)



SD 8105・G10・土器出土
状況（東から）

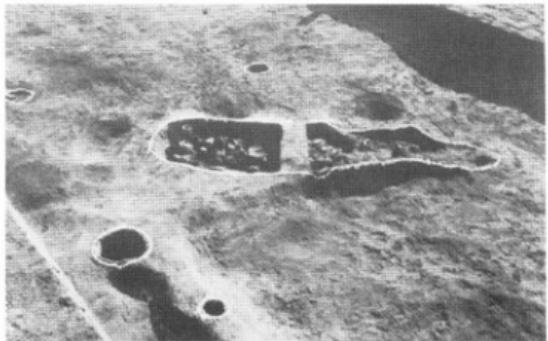
E 6・F 6 ピット群
(南東から)



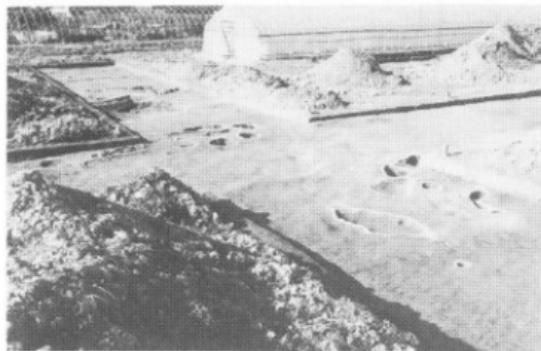
E 6・F 6 ピット群
(東から)



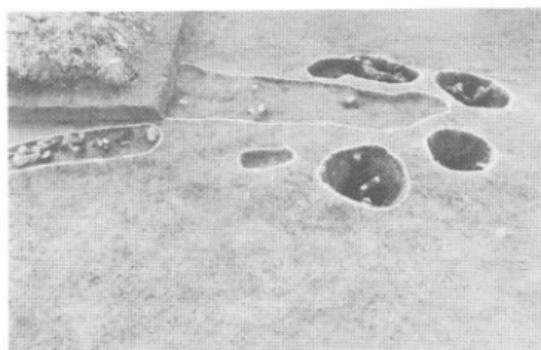
F 6・S P 8125 遺物出土状況
(北東から)



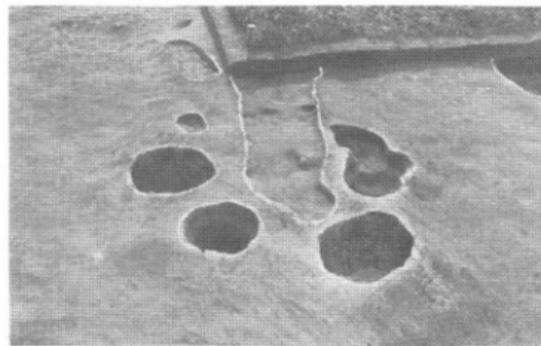
図版 10



H5・6・I 6 ピット群
(東南東から)



H5・6・I 6 ピット群遺物出
土状況 (東から)



H5・6・I 6 ピット群完掘後
(北から)

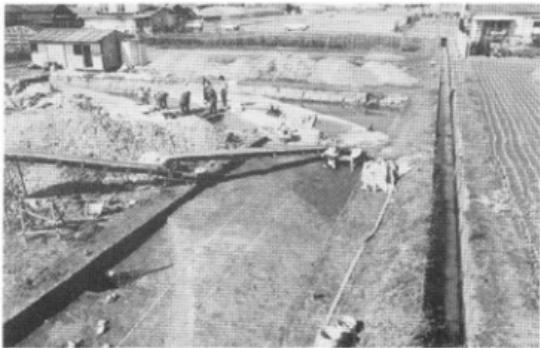
SD 8104 完掘前
(南東から)



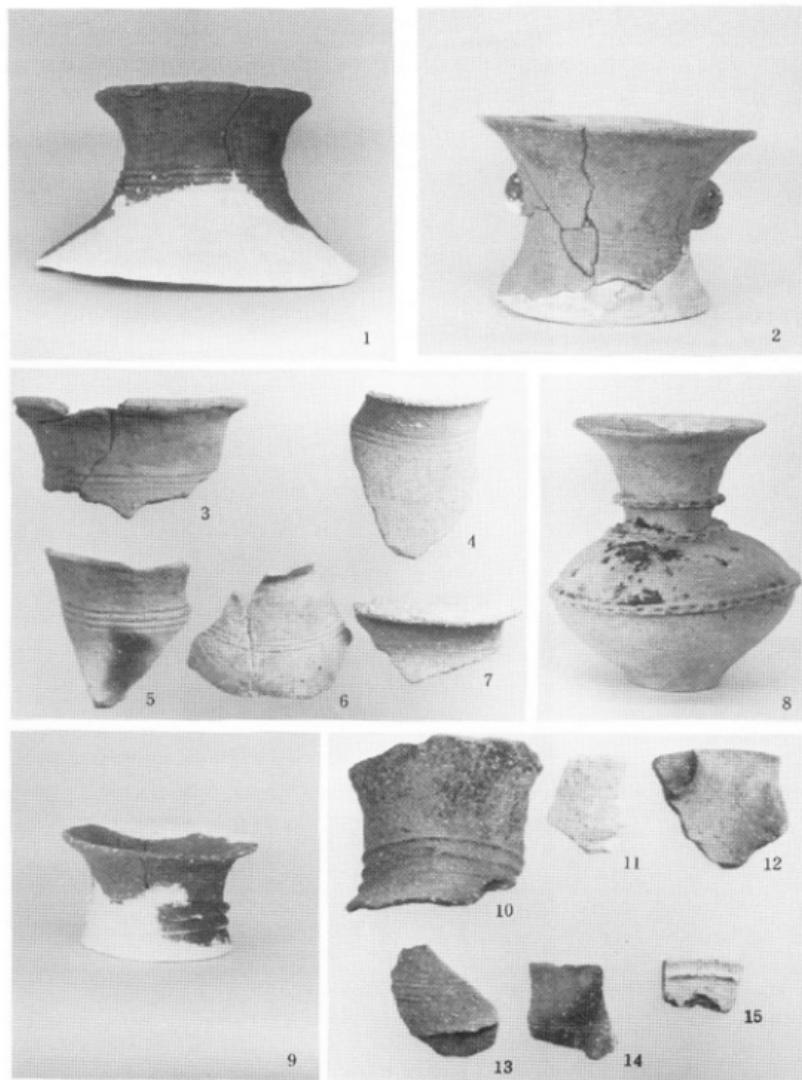
SD 8104 完掘後
(北西から)



SD 8101 発掘風景
(南東から)

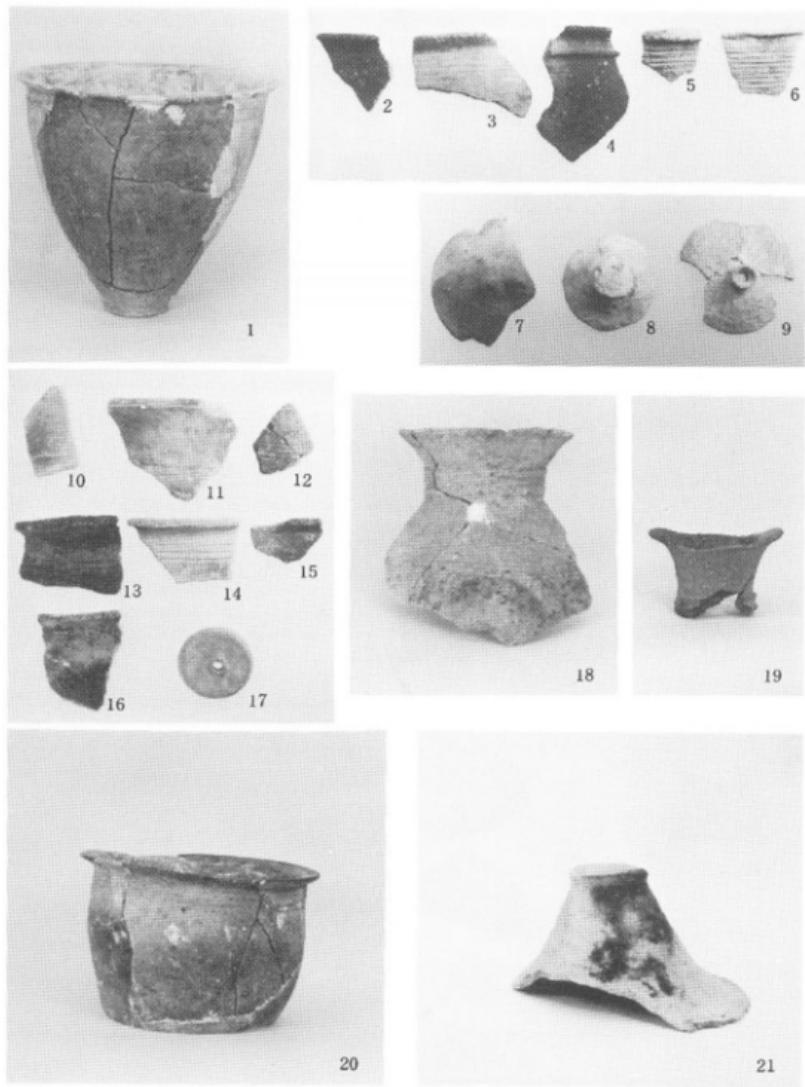


圖版 12



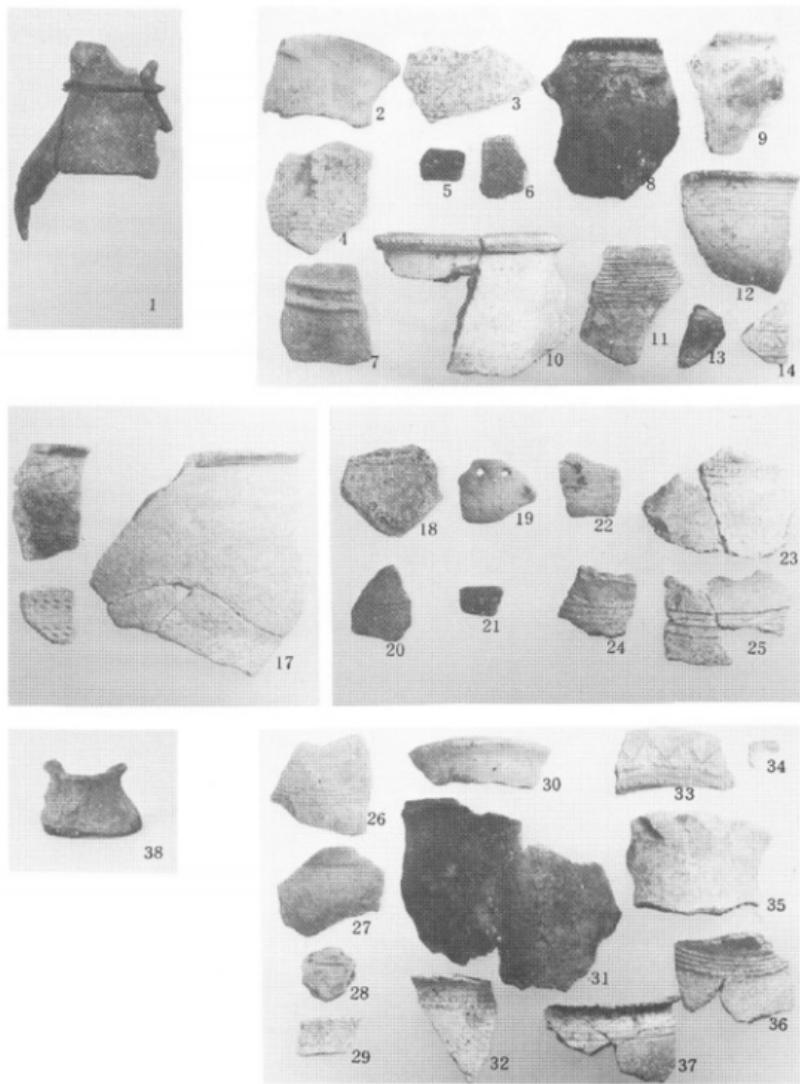
SD 8101上屬出土土器

圖版 13



SD8101出土土器(1~7上層, 10~17下層, 他一括)

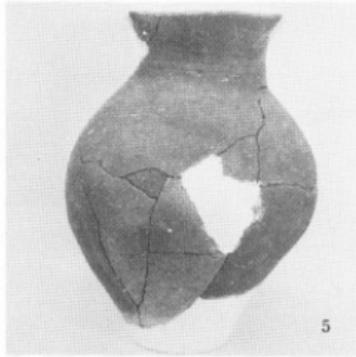
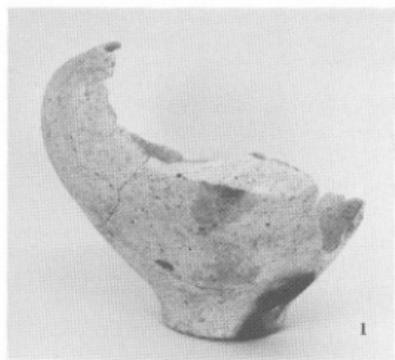
図版 14



SD8102, 03, 04 及び ピット出土土器 (1~8・10~17 SD8102 ,

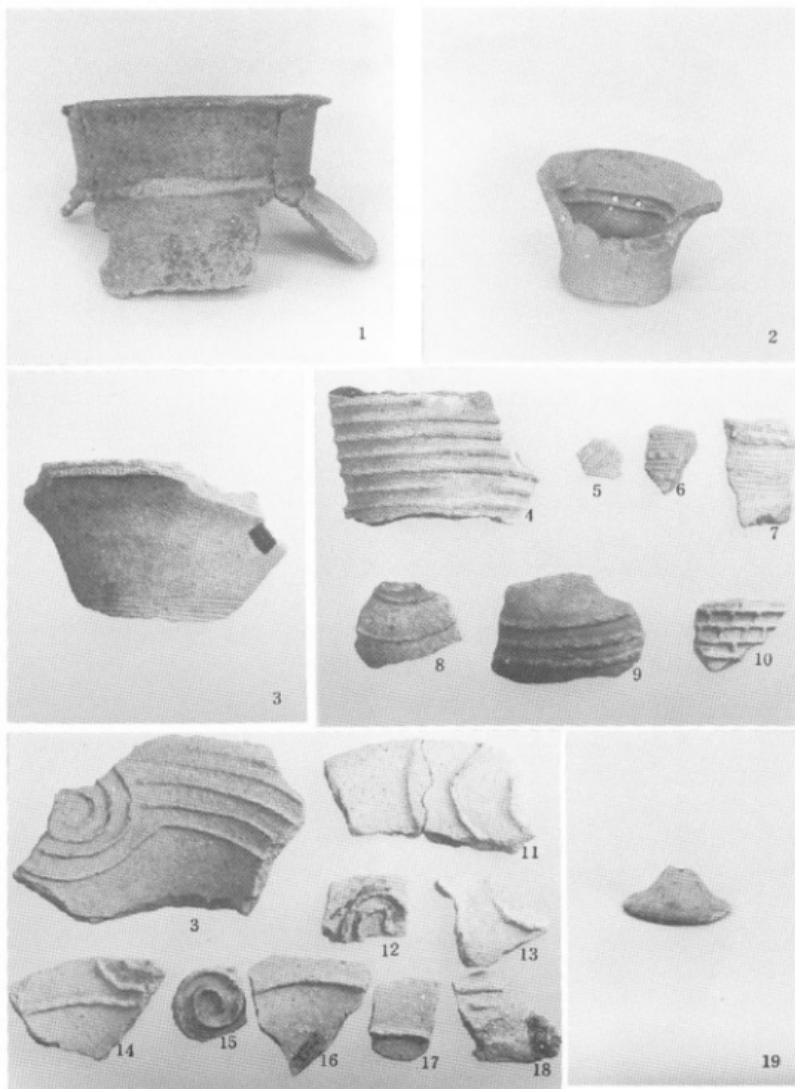
18~21 SD8103, 9・22~25 SD8104, 26~29 SK8117,

30~32 SK8125, 33~34 SK8108, 35~38 SK8110)

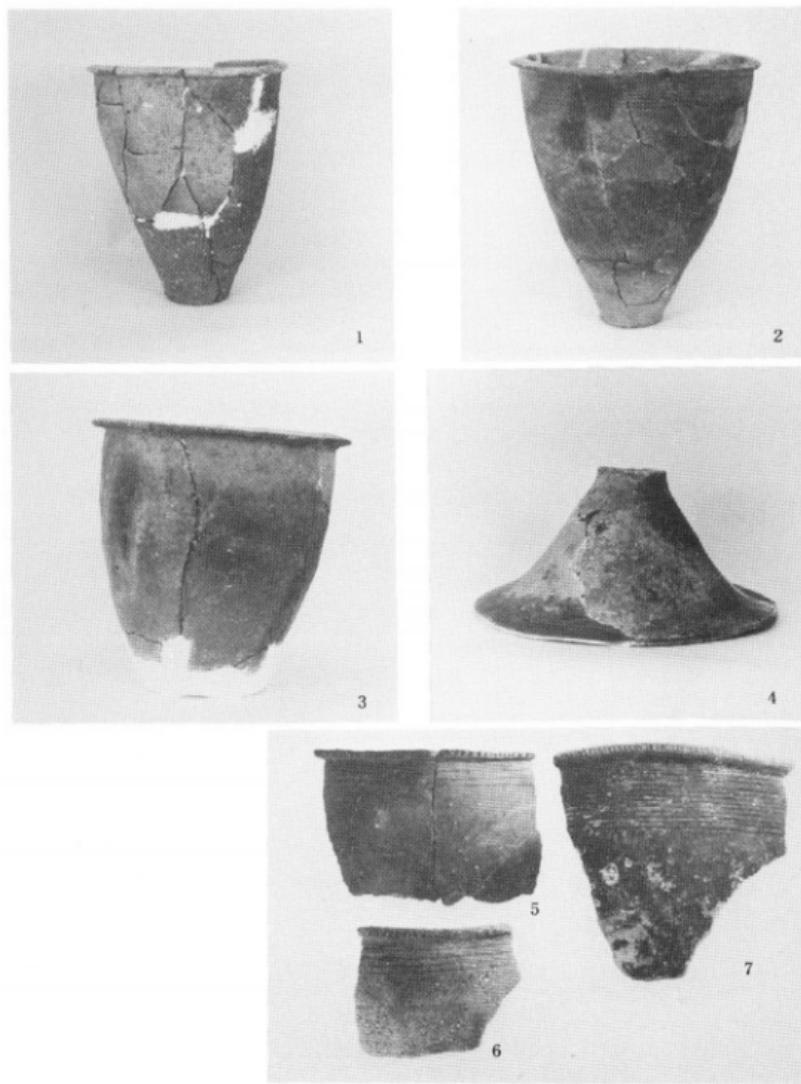


S D 8105 上層出土土器

圖版 16

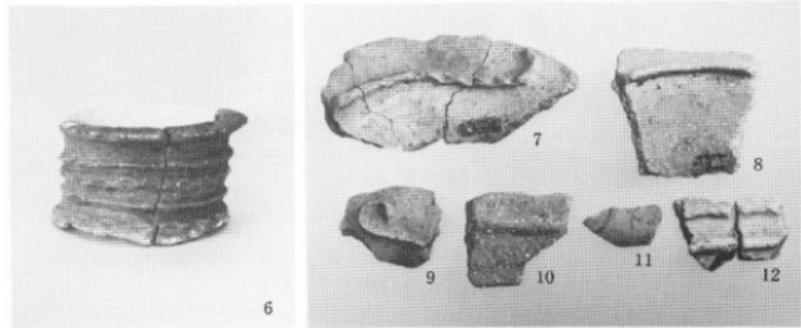
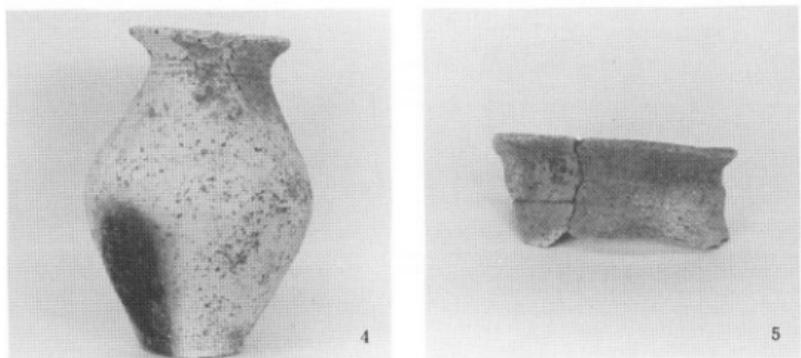
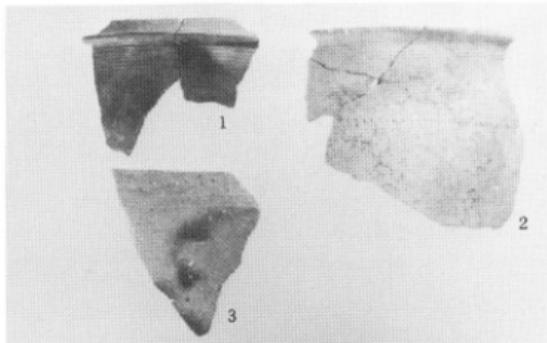


SD 8105 上層出土土器

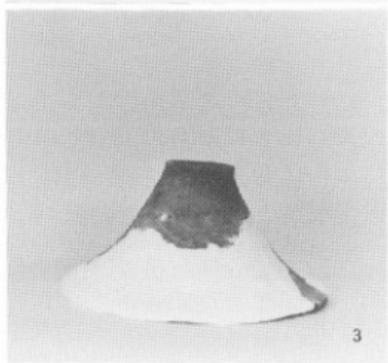


SD 8105 上層出土土器

圖版 18

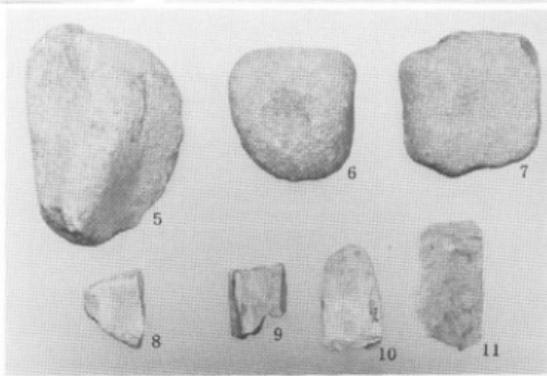


SD8105上層，中層出土土器（1~3上層，4~12中層）



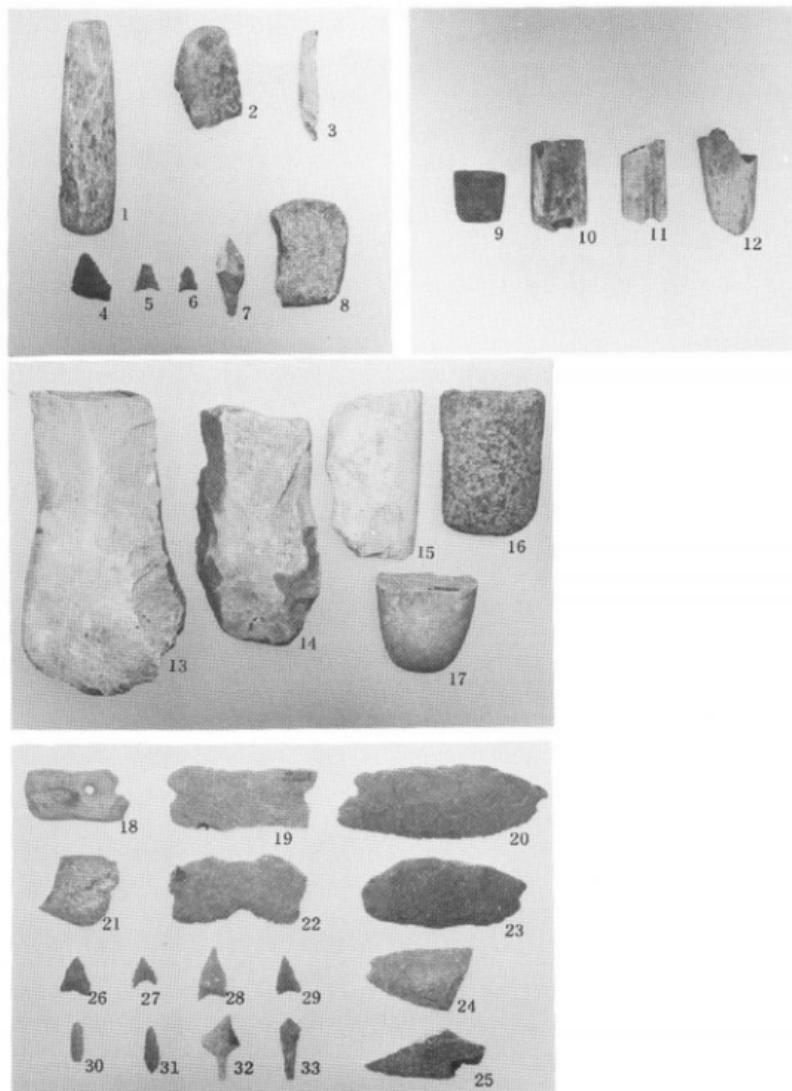
▲ 1 ~ 4 SD 8105 中層

5 ~ 11 SD 8101 ►

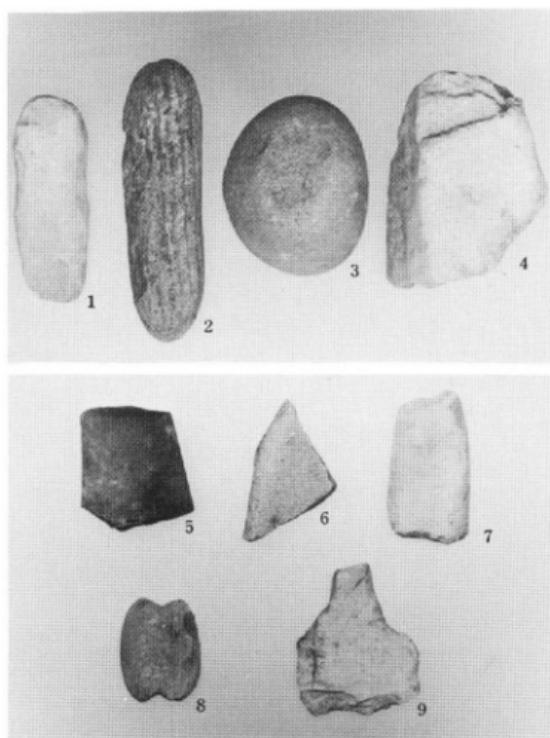


SD 8105 中層出土土器，SD 8101 出土石器

図版 20



SD8102, 04, 05. 出土石器 (1~3・5~7 SD8101, 4・8 SD8104,
9~33 SD8105)



SD 8105 出土石器

卷之二十一

表2 土器觀察表 (ii)

表3 土器観察表(Ⅲ)

番号	解説番号	遺傳子	遺傳	土壌	グリッド	膜層	口巻	器具	胎	胚	子	初期段階		
												3mm以下	3mm以上	
70	18-13	SD8105	上層	E 7	葦	-	-	-	-	-	-	初期段階	初期段階	
71	19-1	"	上層	D 7	"	-	-	-	-	-	-	初期段階	初期段階	
72	19-2	"	上層	D 7	"	-	-	-	-	-	-	初期段階	初期段階	
73	19-3	"	上層	D 6	"	2.28	-	-	4~5mm以下	トの形	"	初期段階	初期段階	
74	19-4	"	上層	G 10	"	-	-	-	4mm以下	トの形	"	初期段階	初期段階	
75	19-5	"	上層	G 10	"	-	-	-	1mm以下の形	を含む	"	初期段階	初期段階	
76	19-6	"	上層	H 10	"	-	-	-	5mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
77	19-7	"	上層	E 7	"	-	-	-	2mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
78	19-8	"	上層	"	"	-	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
79	20-1	"	上層	G 10	壳	2.24	-	-	5mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
80	20-2	"	上層	"	"	2.00	-	-	5mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
81	20-3	"	上層	"	"	2.30	-	-	1mm以上の形	を含む	"	初期段階	初期段階	
82	20-4	"	上層	E 7	"	2.10	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
83	20-5	"	上層	G 10	"	2.10	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
84	20-6	"	上層	D 5	"	-	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
85	20-7	"	上層	G 10	"	2.60	-	-	4mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
86	20-8	"	上層	"	"	2.40	-	-	2~3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
87	20-9	"	上層	"	"	2.05	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
88	20-10	"	上層	E 7	"	1.83	-	-	"	2.5mm以下	"	初期段階	初期段階	
89	20-11	"	上層	G 10	"	1.50	-	-	"	2.5mm以下	"	初期段階	初期段階	
90	20-12	"	上層	G 10	"	3.53	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
91	21-1	"	上層	D 7	"	2.40	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
92	21-2	"	上層	G 10	"	2.00	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
93	21-3	"	上層	"	"	4.86	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
94	21-4	"	上層	D 6	"	2.11	-	-	1~2.3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
95	21-5	"	上層	D 7	"	2.50	-	-	5mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
96	21-6	"	上層	"	"	-	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
97	21-7	"	上層	"	"	1.72	-	-	"	2.5mm以下	"	初期段階	初期段階	
98	21-8	"	上層	G 10	高杯	2.40	-	-	3mm以下	の形	"	初期段階	初期段階	
99	21-9	"	上層	"	"	2.30	1.13	4mm以下	の形	を含む	"	初期段階	初期段階	
100	21-10	"	上層	E 7	"	8.3	-	-	2mm以下	の形	を含む	"	初期段階	初期段階

中の池遺跡発掘調査概要

—香川県丸亀市金倉町所在の
弥生時代遺跡の調査—

1982年3月31日発行

発行 丸亀市教育委員会
丸亀市大手町2-1

印刷 久野印刷有限会社
丸亀市福島町84番地
